

資料3

2012 年度後期学校ボランティア活動レポート集

目 次

土屋小学校・後期

1. ひきつける工夫	刈部 真里 150
2. 子どもたちとの関係を築くために	酒井 翔平 150
3. 2年間を通して知った教員の心構え	小此木 彩 151
4. 小学生と中学生の違い	吉田 成美 152
5. 児童をまとめる能力の重要性	長嶺 由騎 153
6. 安全な学校づくり	永見 宏樹 154
7. 感謝の大切さ	芦川 太一 155
8. 「正しい行動とは」を教える	植田智華子 156
9. 子どもたちと授業	栗林 安幸 157
10. 教師としての責任	宮下愛梨彩 158
11. 反省と発見～二度目の学校ボランティア～	中山 直之 159

みずほ小学校・後期

12. 些細なことでも	田村 亮 160
13. 教える立場になって気付いたこと	政野屋陽太 161

土沢中学校・後期

14. 教科間の繋がりを考える ～理科と数学をどのように関連付けるか～	工藤 若菜	162
15. すべての生徒が参加する授業と教師としてのやりがい	四ツ家大祥	163
16. 話しかける勇氣	松井公拓朗	164
17. 授業内で取り組むこと	松島 勇太	165
18. 私の考える教師像	中島嵯恵子	166
19. 新たに变化した意識	大月あゆみ	167
20. ホームページ作りで学んだこと	渡邊 美優	168
21. 当たり前の大切さ	小林真理子	169
22. 生徒が私に教えてくれたこと	中尾 真穂	170
23. 理想へのきっかけ	丸山彩恵子	171
24. 誰が先生？	水戸 紘子	172
25. 教師の役割	柿澤 拓也	173
26. 立場が変わって気付けたこと	小嶋 啓喬	174
27. 1対1で見えるもの	横山 怜史	175
28. 「大人」として	続橋 直弥	176
29. 学年による生徒の対応の違い	佐々木 翔	177
30. 視点が変化して感じたこと	柳沢 甫子	178
31. 教師の立場に変わって気づいたこと	高萩 貴博	179

羽沢小学校・後期

- 3 2. 教育とは能力を引き出すこと 佐藤 彩香 180

土屋小学校・土沢中学校・後期

- 3 3. 学校行事による人間関係の形成 田中 浩貴 182

- 3 4. 対象・目的に合わせた板書づくり 栗原 史帆 183

みずほ小学校・土沢中学校・後期

- 3 5. 先生方の視点 福田 晋也 184

土沢中学校・伊勢原高校・後期

- 3 6. 学ぶことができること 佐々木大輔 185

土屋小学校・後期

1. ひきつける工夫

情報科学専攻 1年 刈部 真里

私は、後期に平塚市立土屋小学校へボランティアに行きました。授業のサポートとしてお手伝いをさせて頂き、子ども達と一緒に給食を食べました。また、校務さんのお手伝いとして剪定などの作業も行いました。とても楽しく、勉強になる時間を過ごしました。

この学校ボランティアを通して私が気になったことは、授業を面白くするための様々な工夫についてです。

最初に見たのは、6年生の算数の授業です。内容は「速さ」でした。速さの授業は、道のりと時間を用いて速さを求めたり、時間と速さで道のりを求めたりする授業内容です。この速さの公式を覚えるために、授業では円の中をT字で区切ったものに、道のり、時間、速さを入れたものを活用します。この円は「みはじ」と呼ばれたり、道のりの言い方を距離に変えて、「はじき」などと呼ばれています。この円を用いて、速度や道のり、時間を求める文章題に取り組んでいきます。これだけでは子どもの苦手な文章題に取り組むだけで面白さがありません。また、この授業の中に面白さというものを入れるのはとても難しいことだと感じます。しかし先生は、「はじき」の円の部分で、自分の年齢が三十路であることを利用して、速さの言い方を速度に変えた「みそじ」の円として教えるようにしていました。それを伝える際にも、自分は今何歳であるかを子ども達に訊いて、言葉のキャッチボールをするようにしていました。

また、3年生の社会の授業では、買い物について学習する内容の授業の最初でした。その日は、新聞に入っている広告の紙を黒板に張り付けます。子ども達がよく知っているお店の広告

を見せることで興味を示させ、どの野菜が安いのか、どの服が安くなっているのか、といったことを子ども達と話し合っていました。そして最後に、普段家族でどんな店で買い物をしているかをノートに書かせていました。

上記のように、普通の授業の中に少しでも工夫があると、子ども達の興味の有無が異なってきます。また、先生と子ども達が対話出来るような環境にする、ということも、子ども達をひきつけるにはとても大切だと思います。中には、速さの単元のような工夫が難しいものもありますが、その単元でも工夫出来ることはないかと、先生は一生懸命考えたと思います。私達も模擬授業を行う際、どのような授業をしたら生徒がひきつけられるか、興味を持ってくれるのか、ということを考えています。このように、どうしたら生徒がひきつけられるか、興味を持ってくれるのだろうか、と考えることこそ、大切なのではないかと思います。

前回の学校ボランティアでは授業外のことを中心に見ていましたが、今回は授業中の先生方の工夫を見ることが出来ました。私も教員となった際に、授業に工夫を持たせたい、という気持ちを忘れないようにしたいと思いました。

2. 子どもたちとの関係を築くために

情報科学科 4年 酒井 翔平

私は、後期に平塚市立土屋小学校にて学校ボランティアをさせていただきました。主な活動内容は、各クラスの授業の参観や補助、校務作業の補助です。

私が子どもたちとの関係を築くために重要であると感じたものは「時間」と「積極的な姿勢」です。

まず、「時間」が重要であると思ったのは、これまで取り組んできた学校ボランティアの時

間との違いがあります。今年度の前期までは週に1回ないしは2回程度でした。それに対し今回は週に4回ボランティアをさせていただくことで、子どもたちと関わる時間を増やすことができました。また、校務作業が中心であった前回までと異なり、校務作業と授業の参観・補助が半分ずつになったことで、各学年において授業を受けている子どもたちの様子を見たり、授業を通してコミュニケーションがとれるようになりました。これまでは給食や昼休みの時間に1年生と関わるのがほとんどでしたが、今回は1年から6年までさまざまな子どもたちと接することができ、充実した時間となりました。

「積極的な姿勢」が重要であると思ったのは、各クラスの授業の補助に入らせていただいたことにあります。はじめは教室の後ろで参観させていたideましたが、先生方のご厚意により、補助に入らせていただくことで子どもたちと関わることができました。しかし、関係性が薄い段階では子どもたちから質問したり話しかけてくれることはなく、このとき自分から働きかけることが必要であると思いました。まず行ったことは、子どもたちが書いているノートや作っている作品を観察することです。観察によってその子が何を考えているか、何を表現したいかを考えました。そのうえで子どもたちに話しかけ、学習の手助けをするように心がけました。一番得意である算数の時間には、子どもたちがつまづいている部分に対し、どうして間違っているのかを子どもの考え方を聞きながら理解し、その子にあった教え方を心がけました。その結果子どもたちが問題を答えることができ、ありがとうと言ってくれたときは、とてもうれしい気持ちになりました。授業の回数を重ねるごとに子どもたちとの関係性も密になり、最近では子どもたちからわからない部分に対し、聞いてくれるようになりました。

授業以外には、掃除の時間や休み時間などで積極的に子どもたちと関わろうと心がけました。掃除の時間では、子どもたちの手本となる

ように率先して机や椅子を運んだり、ほうきで掃いたりしました。また、休み時間には校庭に向かい子どもたちのなかに入れてもらい一緒に遊んだりしました。

さまざまな場面で子どもたちと接することにより、それぞれの子における表情や行動の違いなどを感じることができました。

今回の学校ボランティアを通して一番うれしかったことは、多くの子どもたちが私の名前を呼んでくれるようになったことです。これは週4回ボランティアに行ったことの成果でもあります。また、ボランティアを通して学んだことは子どもたちとの関係性を築くためには、たくさん時間を子どもたちと過ごすこと、積極的に子どもたちに働きかけていくことが重要であると感じました。私が教員になったときには、ボランティアで学んだことを通して、子どもたちとの関係性を築いていけたらと思います。

3. 2年間を通して知った教員の心構え

情報科学科 4年 小此木 彩

今回10月から12月までの3ヶ月間平塚市立土屋小学校に学校ボランティアとして行かせてもらいました。9:30-13:00の間活動しました。ボランティアの内容としては、クラスに入り授業の補佐をしたり、校務作業を手伝います。給食と一緒に食べ、清掃の手伝いをし、昼休みに遊んでその日が終わります。校務作業では学校の敷地内にある木の剪定、いも掘りの補佐とともに校務員について仕事をします。時折教員の仕事を手伝うこともあります。授業の補佐としてそれぞれの学年に入った時は児童がわからずとまどっているときに助言をしたり、教師役として児童のテスト直しと一緒に確認しました。

今までは低学年に入ることが多かったのが高学年の児童と触れ合う機会が少なかったのですが、今回は高学年の児童と話す機会が多くあ

り、低学年の児童とは話さない内容の話もしたりと小学校の6年間の成長は目に見えて分かるのだと改めて感じました。

また自分の意識の変化の点で感じることは、やはり夢でもあった教員になれることが正式に決まりこれから教員としてどのように振る舞わなければいけないのかなど教員としての心構えを習得できたらと教員と多くコミュニケーションをとることを心がけました。教員の方々と話してみても、教師とはこういうものだという確固たる教師像というのは抱かずに必ず守らなければいけないことを守るということを頭に置いておけばいいと感じました。「柔軟さ」このことも教師にとって必要不可欠で、最も重要といっても過言でもないかと私は感じました。

教師になるということは制限もつくし、大変なこともたくさんある。大半が大変かもしれないが、毎日少しずつ成長していく児童を近くで見守ることができるこのことで教師になってよかったと感じる。ある教員がこう言っていました。私もそう感じられるように自分の職務を全うしたいと感じました。今回のボランティアは教師になる前に教師としての仕事に少しだけ触れられた気がします。このような機会というのはめったにあるものではないのでほんとに感謝しています。

土屋小学校に通って2年がたちました。この2年間で学校という社会がどう構成されているのか、どのように機能しているのか“教わる側”では分からなかったことも少し理解できたと感じています。

4. 小学生と中学生の違い

情報科学科 4年 吉田 成美

私は2年生の後期から毎年後期だけですが土屋小学校のボランティアに参加させていただきました。

今回は毎週水曜日の午前中から、児童学習補助や校務作業のお手伝い等が主な活動内容です。

土屋小学校の児童たちはとても素直で、声をかけてくれたり、あいさつをしてくれたり元気な子どもが多く、学年関係なく児童同士の仲がいいと思います。はじめて学校に行ったときも、子どもたちから声をかけてくれ、すぐに仲良くなれたのを覚えています。

校務員の小泉さんとの作業も楽しく、子どもたちのために動く大人は保護者や先生だけではないことがこのボランティアで改めて実感することができました。

また、学習補助では算数の時間に入らせていただくことが多く、子どもたちがつまづいてしまうところがみれたり、実際に子どもに教えるなかでどういったふうに教えればわかりやすいのか考えたりと、教師になった際に役立つと思えることがたくさんありました。

特に、今回は教育実習に行ったあとだったので、生活面に関わる先生の動きを見ても、自分が教師だったらどうするかをいつのまにか考えるようになりました。

私は中学校に教育実習にいったのですが、ボランティアでは小学校を選びました。それは、中学生を見ていて小学生がどのように勉強し、育つのか教育実習にいったからより一層興味を持ち、中学校の教師になるためには両方のことを知っておくべきだと思ったからです。

実際にこうやって小学生は中学生になっていくのかと知ることができました。勉強面では、小学生は生活する上で大切なことを学ぶことがとても多いので、先生も児童に対して中学校よりも厳しく感じました。しかし、児童によっては厳しくしなければやらない子どももいるのでそれも一つの方法だと思いました。

実際に、児童に私自身がヒントをあげすぎてしまい、児童は分かったような気分になっていたのですがそれはその場しのぎでわかったふりをしたのが担任の先生にはわかっていたようで

した。中学校ではそこまで先生がみるというのはあまりないし、そこまで叱らないと思ったので、小学校ではそういうこともあるのだと思いました。

また、生活面では先生が指示することが多く、子どもたちも自分から行動することよりも言われてから、手助けがあってから動きだしたりと、中学校よりも、子ども1人1人が何をしているのか把握すべきだと感じ、先生たちはいつも目配せをされていて、すごいと感じました。

学年が上がるごとにその指示も減っていくのは当たり前ですが、自分にとって当たり前のことが中学生では通じたりしますが、小学生だと通じなかったりするので、説明の仕方も工夫したりと、中学生との関わり方とは違う方法で関わらなければならないと実感しました。

中学校は3週間という短い期間しか実習できませんでしたが、土屋小学校では、週1回か2回約2年間参加させていただいていたので、たくさん児童たちの成長が見られて、教育実習とはまた違った経験ができ、このボランティアで培ったことが教育実習でも生かせたと思っています。

先生の大変さや、子どもたちとの関わり方等とても勉強になりました。

教員採用試験は不合格でしたが、臨時的任用教員か非常勤講師で先生になり、子どもたちの成長に携わり、土屋小学校の子どもたちのような素直で元気な子どもになるよう、教育したいと強く思います。

長い間このような経験をさせていただきありがとうございました。

5. 児童をまとめる能力の重要性

情報科学科 3年 長嶺 由騎

自分は今回毎週木曜日に土屋小学校へ学校ボランティアに行きました。今回が初めてのボラ

ンティアだったので、初めは緊張と不安から表情が固まってしまいました。しかし、土屋小学校の先生や児童はとても親しみやすく、その日中で緊張や不安が無くなりました。土屋小学校は話には聞いていたが自分が想像していた以上に児童の数が少なく、まずそこに驚きました。また、全校児童の数が少ないからだと思うが、上級生と下級生の仲がいいことにも驚かされました。ボランティアでは前半に下級生を持つことが多く、後半に校務員の小泉さんと一緒に校務作業をしました。

初め教室に入った時、緊張から何をすればいいのか分からず、ただ教室を巡回し児童が何をしているかを見ていました。児童とはすぐに仲良くなり、2校時と3校時の間の休み時間は外で鬼ごっこやサッカーなど走り回りました。そこで、ちょっと目を離しただけで喧嘩が始まってしまったりしたこともありました。そこで、自分は泣いている子をなだめる事しか出来ませんでした。教室に戻ると先生がその喧嘩のことを耳にして関係している児童に聞いただしているところを見て、心の底から凄いと思い、今の自分に足りない部分を見つけることが出来ました。ただ、叱って問いただすだけではなく、そのあとの児童へのフォローなどがとてもうまくてほんとに勉強になりました。自分は泣いている子をなだめることしかできなかったのも、まだまだだと実感しました。

後半の校務作業は、本当に学校の裏の仕事をしました。今までは、校務員のことなど全然知らなく、もちろん仕事のことなど考えたこともありませんでした。しかし、このボランティアで校務の仕事をしてみて校務の先生の偉大さが分かりました。本当に児童のことを思って危険な場所を作らないように工夫をしてあったり、壊れているところがないか、点検したり直したりと学校の運営上本当に必要不可欠な存在だと思いました。このボランティアで校務の作業をして、校務の方の見方が180度かわりました。

今回のボランティアでは、本当の現場に立っ

てみて自分に足りないところに気がつき、裏の仕事の重要性などを知ることができ本当にいい経験ができました。今までは児童として学校に行っていたが、ボランティアで先生へと立場が変わると、こうも景色が変わるものかと実感しました。模擬授業では「教えられれば大丈夫だろ」くらいに思っていたましたが、実際のクラスに入ると勉強が出来る子とそうでない子の差がとても激しく、本当に理解しているのかを判断するのがとても難しく、児童の表情などをうまく読みとらないといけないと思いました。

また今回の経験で、学校の裏の仕事を経験し、自分に足りない児童をまとめる力や、アメとムチではないが叱るときとそうでないときのONとOFFをしっかりしないとけないということに気がつくことが出来たので、この力を教育実習に行くまでに身につけられるようにしたいと思いました。

6. 安全な学校づくり

情報科学科 3年 永見 宏樹

今回の学校ボランティアで私は、土沢小学校に毎週木曜日の午前中(9:30-11:15)に行きました。そこでの活動内容は校務の方の手伝いをしたり、休み時間に児童と遊んだり、話をしたりすることでした。

今回の学校ボランティアで特に印象に残っているのは、校務の方や先生方の作業です。児童が毎朝学校に登校し、休み時間になると外にでてきて思いっきり走り回って遊んだりしていました。児童が学校の敷地内で思いっきり走り回れる、遊べるということが校務の方が毎日学校の敷地内を回って児童がケガをしないようにするために、木にいる虫をとったり、落ち葉を集めたりと学校の点検を行っていました。また、木の手入れをするときも休み時間になったら、児童が外に出てくるので枝きりばさみなどの刃

物は片付けたりと安全に気をつけていました。

私も小学生のときは、何も考えずに当たり前のように休み時間に友達と遊んでいたけど、そのために先生方は、児童が安全に楽しく過ごせる学校づくりを行っていることがわかりました。

また、焼き芋をしたときに、その準備を3ヶ月くらい前から行っていることに驚きました。最初は火をおこして芋を入れるだけだと思っていたのが火をおこすのに使う木材を業者の方に早めに連絡を入れていたり、実際に試し焼きをしてどの芋の大きさなら何分くらいで焼きあがるかなど焼き芋をするだけなのに先生方や校務の方は何ヶ月も前からいろいろな準備をしていることがわかりました。

行事があると準備は大変だけど行事で児童が楽しそうにしているのを見るととてもやりがいがあると思いました。

また、実際にクラスに入ってさまざまな学年の授業の様子を見ることができました。そのときにプリントの丸付けをしたり、授業の様子を見たりしていました。そこで気がついたことは、プリントの丸付けをしたときに答えがあっていると児童たちはとても喜んでいてとても素直だなと思いました。また、早く終わった人にシールをあげたりして児童も楽しそうでした。

また、授業中などに話をしている児童には厳しく注意をしたりとメリハリがあると思いました。

今回立場が変わって、先生方も児童たちに楽しく学習をするために、いろいろな工夫をしていると思いました。

今回の学校ボランティアを通して児童たちが毎日思いっきり遊べるために先生方や校務の方のいろいろな配慮があって学校が安全であるとわかりました。また、自分が通っていた学校とは違うことだったり、同じようなこともあったり、学校ボランティアを通して普段の生活ではなかなか体験できないとても貴重な体験ができたと思います。

7. 感謝の大切さ

情報科学科 3年 芦川 太一

私は土屋小学校へ毎週木曜日の9:30～12:30に学校ボランティアに行きました。ボランティアの内容は、授業のお手伝いとして、算数の時間に先生方と一緒に採点や、授業に遅れてしまっている生徒のサポート、体育に時間にマット敷くお手伝いなどをしました。校務作業のお手伝いとして、冬に備えて石油ストーブの点検やコードの交換、学校内に植えてある木の手入れ、菊の植え替え、落ち葉の掃除、ベルマークを既定の大きさに切る作業もしました。また、生徒と一緒に給食を食べたり、休み時間に一緒に遊んだりもしました。

私は今回ボランティアに行くまでは校務員の方がどのような仕事をしているのかほとんど知りませんでしたが、今回ボランティアに行ったことで、校務作業の大切さや生徒たちの安全を守るための工夫について学びました。

まず、学校内に植えてある木の手入れについてですが、木に蜂の巣ができてしまうと木の近くで遊ぶ生徒たちが、蜂に刺されて怪我をしてしまう危険があるので、巣ができにくいように枝を切ったり、もし巣ができても早期発見ができるよう、木の内側から枝が見えやすいように、また、外から見たときに見栄えが悪くならないように外側は残しながら内側を工夫して手入れをしたりしていました。

次に落ち葉の掃除についてですが、生徒たちが学校内の落ち葉を拾う行事がありました。その際に、限られた時間の中で生徒たちが自分たちで落ち葉を拾い、学校をきれいにしているとってもらうために、下準備としてブロウを使い散らばっている落ち葉を大まかに集め、短時間で落ち葉拾いができるように工夫をしていました。また、私が校務作業をした際も集められ

ていたので、私たち学生ボランティアのためにも下準備してくれていることに気づけました。

そして、校務作業の中で、草を刈る際に使う草刈り機や、植木の手入れのための高枝ばさみや剪定ばさみなど、生徒が近づいてきたり、触ったりしまうと怪我をしてしまう危険がある機械を使う際は、授業中など生徒がいない時に使ったり、生徒がいない教室でドアを閉めて使いました。そして、生徒がいる休み時間などの前には生徒の目の届かないところに仕舞うという工夫をしていました。また、機械自体も、草刈り機の刃を金属製ではなくナイロン製のコード刃にするなど安全な物を使う工夫をしていました。

このように校務員の方は、校務作業の際には常に生徒のことを考え、工夫し、学校を支えていることを学びました。

また、生徒たちと関わることで学んだことはコミュニケーションをとることの難しさでした。生徒たちと一緒に給食を食べたり、遊んだりしている中で、自分から話しかけてくれる生徒とはコミュニケーションをとれましたが、自分からは話しかけてくれない生徒もいたので、そのような生徒には私から話かけるなど積極的にコミュニケーションをとることを心がけましたが、会話が続かないなどの私自身のコミュニケーション能力の足りなさに気づくことができました。なので、教師になるために、今後の大学生活ではコミュニケーション能力を向上させていきたいと考えています。

私は今回小学校ボランティアに行ったことで学校は授業をする教師だけで成り立っているのではなく、校務員さんなど裏方の人たちが支えてくれることで成り立っていることに気づけました。また、生徒たちと関わることで教師になりたいという思いが強まりました。そして教師になることができたなら、常に支えてくださる方々に感謝の気持ちを持ち続けようと思います。

8. 「正しい行動とは」を教える

化学科 3年 植田智華子

私は毎週火曜日の9:30~13:10に土屋小学校に学校ボランティアに行きました。この時間は土屋小学校の2~4時間目と給食の時間にあたります。そのため、学校ボランティアでは、1年生から6年生まで様々な学年の2~4時間目の授業に参加しました。参加させてもらった授業は、算数、図工、国語、理科、書写などの教科です。他にも教科以外のものとして、湘南ベルマーレの方々がサッカーを教えに来ていたり、連弾のピアニストのドゥエットウという2人組がピアノを演奏に来ていたりするような活動にも参加させてもらいました。

この学校ボランティアを通して感じたことは、勉強を教えるよりも、生活の中で何が正しいのか正しくないのかを教えるほうが難しかったと思います。今まで教職課程で勉強をしているといえども、実際に先生として子どもたちと関わる場面はありませんでした。そのため、自分にとって常識的なことが子どもたちにとってそうではないことに改めて気付かされました。

私自身が今まで持っていた考えとして、相手を説得する、という方法で間違っていることをやめさせる、ということが正しいと考えていました。その方法であれば、その場しのぎの対処ではなく、なぜ間違っていたのかがわかり、今後似たような状況になったとき、正しくないことがわかると考えていたからです。

しかし、学校ボランティアに行くと、この方法では対応できない場面が多々ありました。小学校1年生の算数の授業のことです。テストが他の子よりも早く終わったら休み時間にしている、という状況でのテストでした。そのためほとんどの人が終わった中でまだテストをしている子もいました。そんな子のテストに早く終わった子が口出しをしてしまう場面がありました。このとき、私は説得して止めようとしまし

たが、適切な説得が浮かばず、子どもたちにうまく聞き入れてもらえませんでした。結局、先生がきつい口調で止めたことでそれがなくなりました。このとき、私のやり方が適さない場面があり、なぜ間違っているのかではなく、それが間違っているということを教えなければならぬことがあると気付きました。

しかし、先生が子どもを叱っている場面を多々見る中で、説得することとぎつく止めることの境界はどこに引けばいいかを考えていました。ぎつく止めても、どうして間違っているのかが伝わらず、先生が叱ったからそれが間違っていると子どもたちの中で結論づけられてはいけなと感じていました。

そんな中で、小学校2年生の授業内の算数のテストがありました。先生はテストでミスをするように注意を色々していました。そんな中である子どもが他の子と話をしていました。その子に先生は「あなたの両親はそんなにあなたの話を聞いてくれないんですか?! そうやっていつも話を聞かないからミスするんじゃないんですか!? そういうの、おっちょこちょいって言うんです! このおっちょこちょい!!」ときつい口調で言って叱りました。このときこの叱り方には説得とぎつく止めることの両方を兼ねていると思いました。この叱り方なら、言葉の内容からどうして間違っているのかわかり、口調からすぐに止めることができる。子どもがこのときは止められただけだと感じて、いつかこの言葉を思い出したとき、その意味を噛みしめて納得することができる内容だと思いました。

このような方法で子どもを叱るためには、どうして間違っているかをきちんとわかっている必要があると考えます。間違っていることがどうして間違っているのか、子どもたちに伝えるレベルまでを突き詰めていく必要があると思いました。そしてそれをどのような口調で伝えるかをその場に依拠して判断する必要があります。

この学校ボランティアを通じて、子どもがそ

の人柄を作り上げていくのに影響を与える場面がいくつもありました。先生が子どもを叱る言葉はもちろん、ベルマーレやドウエットウの方の言葉も子どもの考え方に影響を与えていくと感じていました。言葉が相手に与える影響をこれからも考えていきたいと思っています。

9. 子どもたちと授業

化学科 3年 栗林 安幸

土屋小学校へ毎週木曜日 9:30-13:10 にボランティアとして授業や校務作業等の手伝いを行った。ボランティア活動の具体的な内容として、校務作業の手伝いでは、めだかの保護、校内の木の剪定、枯れ葉集め、ベルマーク集めを行った。また、今回は、授業に参加し先生の手伝いをする機会が多かった。5学年の家庭科、4年生の算数と国語、3年生、2年生の書写と体育、1年生の算数と体育と音楽等、様々な学年の様々な授業に先生の補助として参加した。基本的には、算数の授業で採点を行ったり、困っている子どもへのアドバイスを行ったりした。国語・書写では机間巡視を行いながら子どもを授業へ集中するよう促し、必要があればアドバイスした。体育ではマット運動で前転等の首を支えてあげるなどの補助、大縄跳びの縄を回す役を行った。家庭科・音楽は道具の準備や子どもたちとの交流を中心に授業に参加した。その後、給食の時間には小学校の子どもたちと一緒に食べ、給食の片づけ、掃除の手伝いをした。今回は、活動時間が長く、また、子どもたちと交流する機会が多く、いろんな児童と交流することができた。

実際の現場の授業に参加することで、どのように指導をしていくのか間近で見ることができ身につけることができたと感じている。

4年生での算数の授業では、「乗法、除法の計算はどんな事を行っているのか、言葉や図を

使って表現し、説明してみよう」という授業で、子どもたちは、様々な考え方を持っていて、それをどう授業にいかせるかがポイントだと感じた。自分の考えを表現し、わかりやすく相手に伝えることで、表現力が身につくと思った。また、みんなの考え方を共有することで、解き方や考え方のバリエーションを増やすことができ、思考力を養うことにつながると思う。算数科の授業だけに限らず、様々な授業でこのような、表現力や思考力を養う授業が大切だと感じた。

また、授業に参加することを通して、子どもたちを主体とした授業づくりを計画し、実施することで、子どもたちの学習活動がよりよいものになると感じた。4年生の国語の時間では、新聞づくりということで、班ごとにどんな内容の新聞を作るのか、どんな見出しにするのか、記事の配置をどうするかなど、全て子どもたちで考え、作り上げていく。先生は、教材をあたえたり、ヒントを与えたり、基本的には、子どもが主体となることで、思考力、判断力、表現力、さらに授業の内容が身につくと思った。さらに、自立した子どもたちを育てることができると感じた。

20人以上いる子どもたちと交流を通し、多くの子どもたちを、一人で看ることは大変だと改めて感じた。ただ、子ども一人一人の成長を間近で見られるのは、この仕事だけであり、やりがいを感じた。また、授業をつくる上で、日頃の子どもの言動などを注意しながら子どもたちと交流を深めることが大切だと思った。良い授業をつくるヒントを子どもたちが与えてくれていると今回のボランティアを通して思った。休み時間等で、子どもたちの何気ない会話の中で、授業の評価をしていることがあり、それを注意深く聞いたり、自ら子どもたちの会話に入ることで良い授業のヒントが得られると思った。

最後に、これらの経験は、将来、教育実習や実際に教員となったとき必ず役に立つ経験であ

り、この経験を生かせるようにより一層努力していきたい。

10. 教師としての責任

化学科 3年 宮下愛梨彩

私は前期に引き続き、週に1度土屋小学校にボランティアとして行かせていただきました。主な活動内容は校務作業や授業の補助になります。校務作業では、学校の池で飼っているメダカの移動、児童が書き初めて使う台紙の制作のお手伝いをさせていただきました。また、授業の補助では午前中のボランティアのなかで、3つの学年につくなど、多くの学年の授業を見させていただく機会をもらい、児童とのコミュニケーションをとることも出来ました。

今回のボランティアを通して、私が強く感じたことは2つあります。まず1つ目は、教師が児童をどこまで手助けするかということです。これは校務作業を通して感じたことです。書き初めの台紙づくりは、児童の作品を貼るためのもので全校児童分を先生方がつくっていました。とても本格的なもので両端には竹を使用して掛け軸のようでした。決まった大きさに模造紙を切るという単純作業でしたが、その数の多さに大変さを感じました。私が手伝った時では、ひと学年分しか終わることが出来ませんでした。児童からすると、その台紙はあるのが当たり前のように感じるでしょう。裏で先生方が作っていることに気付く児童は少ないのではないかと思います。ですが、台紙があるとないでは児童のやる気も喜びも変わってくると思います。先生方の忙しい中で、手を抜くことなく児童のためと取り組む姿勢に尊敬しました。作業を進める中、通りかかった2年生の担任の先生が、「先生がここまでやる必要はないのではないか。」と仰ってました。初めは厳しい言葉だと感じましたが、確かに高学年の児童であれ

ば、自分たちの分は自分で作れるのではないかと思いました。

教師が児童のため、よりよい環境をつくるのは当然のことだと思います。しかし、児童の為と言って、全てを用意してしまうのは間違っていると思いました。どこまで教師がしてあげるか、この境目を明確にしなければいけないと思いました。この境目は、教師の方針や学年の違いにより様々だとは思いますが、自分でその境目を意識して行動しなければいけないと思いました。まだその境目を私は見分けることは出来ませんが、授業の補助を行う時は、この境目を意識しながら行動しました。私が、教師になった時この境目を明確化出来るように、今回気付くことができ、大きな収穫だと思います。

そして2つ目は、児童は大学生のボランティアではなく、ひとりの先生として接してくれることです。担任の先生とはまた違った親しみやすさの中で、私に頼ってくれる児童が多くいました。プリントに私が付ける丸は、児童にとって先生が付けてくれる丸と同等のものであるのだと感じました。また私のアドバイスや指示も、なんの疑いもなく受け入れてくれます。しかし、児童が勉強の内容以外で分からない時、例えば、総合の時間で、この後どうしたらいいかななどの質問をされた時、私も分からず答えに困ってしまいました。間違ったことを言っていたらどうしようという不安が、語尾や表情に出てしまい、せっかく私を頼って聞いてくれた児童をより不安にさせてしまったこともありました。

私は、自分はボランティアなのだから分からなくてしょうがないと、少し甘えていた部分もあったと思います。児童が深く関わる大人と言えば、両親や教師になると思います。子どもたちは生きていく上で大切なことをこの大人たちから学んでいくと思います。その大切な役割の中に自分も入ることができているのは、信頼があるからこそなんだと思います。一人の先生として扱ってくれることに対してもっと感謝をしなければなりません。先生の言葉や表情を敏感

に感じる児童と接するとき、もっと先生としての自覚と責任感をもたなければならぬと痛感しました。これから行なう教育実習では、私を信頼してくださる先生方と同様に、教師としての自覚を持って臨みたいと思います。

11. 反省と発見 ～二度目の学校ボランティア～

総合理学プログラム 2年 中山 直之

私は今回学校ボランティアとして平塚市立土屋小学校に訪れ、毎週木曜日 12:40～14:50 の間の時間にボランティア活動を行いました。活動内容は子どもたちと給食を摂ることから始まり、校務員さんたちと一緒に様々な雑務を行ったり、学年の授業のお手伝いに行ったりしました。以下にその報告を行います。

今回は前回に引き続き二度目の土屋小学校での学校ボランティア活動でした。今回の学校ボランティア活動で一番よかったなと思ったところは校務員さんや職員の方々たちと仲良くなれたことでした。今回の活動内容は校務員さんたちとの作業、とくに屋内での作業が中心だったので校務員さんや職員の方々たちと交流する機会が多分にあり、いろんなお話を聴いたりして親睦を深められたと想います。今回、校務員さんたちに行った主な作業は「ベルマーク切り」です。大量に集まった未整理のベルマークを利用可能な規格に成型するといった作業で、私なんかでも十分に作業効率に貢献できる内容でした。整理されたベルマークは学用品などの購入に役立てられるらしく、学校ボランティアとしてそういったことに貢献できることはうれしく思いました。また、校務員さんや職員の方々も私のことを大変労っていただいて、とても心遣いのある素敵な方々だなと思いました。

一方で今回は子どもたちとの関係をつくるのが若干疎かになってしまったなと感じたところもありました。二度目の学校ボランティアと

いうことで、前回と比べると多少「慣れ」てしまったところがあり、前回よりも集中力が散漫になり、全体的に日々の活動に明確な目標を持って取り組むことができなかったなという反省があります。

そういったこともあり、一時期は子どもたちとのふれあいや、活発な姿から遠ざかってしまったときもありました。しかし、そんなときに子どもたちが私にその元気な姿を思い出させてくれた出来事がありました。それは土屋小学校の学園祭である「りんどう祭」です。

「りんどう祭」では子どもたちがそれぞれおもいおもいに様々な催し物を出していて、そのひとつひとつに子どもたちの創意工夫と一生懸命な取り組みを見て取ることができて素直に「すごいなあ」と思いました。私はスケジュールの問題であまり多くの時間見てまわることはできませんでしたが、それでも子どもたちの活き活きとした姿はとてもよく伝わってきて、私自身にも「がんばろう」と思わせてくれるような出来事でした。

それから、時運も重なったのか子どもたちとふれあう機会が多くなりました。授業のお手伝いに行く機会が増えたこともあります。その他にも休み時間などにいっしょにゲームに参加させてもらったりしたことも一つとしてありました。そのときも職員さんがいっしょにあそんでくれるよう取り計らっていただいたおかげで、私なんかでも自然に輪に入り込むことができ、ドッジボールなど様々なゲームに参加させてもらうことができました。また、子どもたちといっしょにゲームに参加して活動していく中で感じたことは、まず子どもたちの運動能力の高さでした。私自身がまったく運動ができないということもありますが、私がちょっと油断していると簡単に付け込まれたりなどして、小学生とはいえなかなかあなどれないなと感じました。そしてもうひとつ感じたことは、子どもたちといっしょに体を動かしたりしたことによって、こんなふうに体をつかって遊んだりするの

はとても久しぶりだなということです。自分の子どものころの感覚や記憶がふとよみがえるように感じました。子どもと接するということにはこのように自分の原点を自らの心象に呼び起こすという側面も持ち合わせているのだと感じました。

今回の学校ボランティア活動は反省も多くありましたが、また同時にたくさんの新しい発見を私にもたらせてくれました。また機会があれば参加したいと思います。

みずほ小学校・後期

12. 些細なことでも

国際経営科 3年 田村 亮

私は、みずほ小学校へ毎週水曜日、小学校ボランティアに行きました。ボランティアの内容は授業内の学習支援が主な活動でした。学習支援を行う学年は2年生から6年生となっていました。最初の方は学習支援といっても教える教科によっては、教室の後ろにいてただ先生の授業を見学していただだけの活動になっていました。しかし、それでは得るものがあまりないと感じ、まず児童とコミュニケーションをとることから始めました。お昼休みでは必ずグラウンドや体育館に行き一緒にサッカーやバスケなどをして遊びました。やはり最初はなかなかコミュニケーションはとれなかったのですが、スポーツなどの遊びを通して児童の方から話かけてくれるようになり、自分から行動を起こして正解だったと思いました。

そのなかでも印象にのこっていることがありました。それはある児童が「私の名前覚えている？」と聞いてきたので、覚えてますよとその児童の名前を言ってあげると、「覚えてくれてたんだ」と、とても嬉しそうにしていました。ただ名前を覚えていただけなのに、なんでこんなに嬉しそうなのか最初は疑問に思っていましたが、考えていると、あることを思い出しました。それは、私自身が小学生のときに新任の担任の先生にすぐに名前を呼んでいただいととても嬉しかったということです。そのときの感情はあまり思い出せないのですが、「この先生は自分のことをこんなに早く覚えてくれていたんだ」という気持ちだったと思います。ただ名前を覚えていたということがこんなにも喜ばれるものなんだと、改めて感じることができました。さらに、教職課程を履修している先輩が「教

育実習のときはなるべく早く顔と名前を覚えておいたほうがいい」と教えてくれましたが、こういう体験を通してより実感することができました。

また、先生の授業を実際に近くで体験させてもらいとても勉強になったことがいくつかありました。児童がざわついていたときの対処の仕方です。ちょうど私がボランティアをしていたクラスの児童が体育の準備体操前にざわざわして、とても始められる感じではない状態でした。そのとき私は先生は叱るんだろうなと思っていましたが、先生は児童をただ見ているだけで何もいいませんでした。するとある児童がその様子に気づいたようで「みんな静かにしようよ」と声掛けをしていました。するとその声がだんだんと増えていきすぐにざわつきは収まりました。先生はそのとき叱って、児童に気付かせるのではなく、児童自身に気付かせるようにわざとなにも話さないでいたのです。ざわつきを鎮めるこのやり方を私自身知っていましたが、先生の些細な技巧を実際に観て体験したことでより勉強になることができました。

今回のボランティアを通して、名前を覚えるといった些細なことやあえてなにも言わないといった技巧などを知ってはいましたが、実際にこの小学校ボランティアを体験したことで改めて些細なことの大切さや技巧の使い方、重要性など、とても多くのことを学ぶことができました。これから教育実習や将来理想の教師になるための基礎の部分学ぶことができたとても有意義な体験であり、改めて“先生”という職業を深く知ることができたと思っています。そしてより教師になるという気持ちが強くなった体験でした。

1.3. 教える立場になって気付いたこと

国際経営学科 3年 政野屋陽太

私は、みずほ小学校へ学校ボランティアに行きました。学校ボランティアは、毎週月曜日の9:30～10:15までと短い時間で行くことになりました。学校ボランティアの内容は、授業に参加して、先生のアシスタントや問題などがわからない児童の補助などの活動を行いました。

みずほ小学校では、一つのクラスを毎週担当するのではなく、毎週違うクラスを回り活動していくという形をとっていました。私がはじめて参加したクラスは、3年2組のクラスでした。3年2組は算数をやっていて、「文章から問題を読み取る」という授業をしていました。初めは、私も児童たちとどう接していけばよいのかわからず、おどおどしていたのが現状でした。しかし、児童のほうから「この問題こういうことであってるの？」と声をかけられました。私は、その児童に対してできるだけ簡単にわかるように説明をしていき、児童は無事自力で問題を解くことができました。児童が問題を解いた後に、私に「ありがとう」という一言を受けて、私にもできることがあるのだと実感したとともに、その「ありがとう」という言葉がとてもうれしくて今でも印象深く残っています。私は、この時からもっと積極的に生徒たちとコミュニケーションをとりに行こうと心掛けるようにしました。

そして、コミュニケーションをとっていく上で気づいたことなどもありました。当たり前ののですが、学校ボランティアに行くと、先生や児童たちによって、クラスの雰囲気が全く違うということが改めて実感したことの一つです。同じ学年でも、3年1組は、3年2組とは雰囲気が全く違いました。その日は、3年2組は体育で、前の授業が終わると整列して外で体育を行うのですが、整列するのに児童たちが遊んだりしてしまっていて、なかなか整列ができずにいまし

た。3年2組は、どちらかというとおとなしいという感じのクラスでしたが、3年1組は、真逆で、とっても活発でまとめるのも一苦勞なクラスでした。大きな声で注意したり、個人的に注意したりして、やっとの思いで整列して体育が始まったのも、授業開始から10分後くらいでした。しかし、授業がいざ始まると、生徒たちも楽しそうに体育に参加していました。このクラスでは、担任の先生もとてもまとめるのが大変そうでした。もし、私が担任の先生の立場だったらどのように行動していたのだろうなどといったことを深く考えるいい機会で、自分をよく見つめなおせて、とても参考になった授業でした。

他にも、5年生や1年生、4年生とさまざまなクラスにボランティアに行き、先生としての生徒との接し方、注意の仕方さまざまなことを学び、自分自身が先生になったらどのように授業をしていくかなどをよく考えるようになりました。

そして、今までは、ただ単に模擬授業などをしていましたが、生徒を意識して授業ができるようになり、自分なりの教師像が少しずつ想像できるようになりました。このボランティアを通して、積極的にコミュニケーションをとり、先生の授業を観て学び、私が教師になる上で、確実にいい方向へ変化していることが気付いて、とてもよかったです。

土沢中学校・後期

1 4.教科間の繋がりを考える ～理科と数学をどのように関連付けるか～

生物科学科 4年 工藤 若菜

今期は毎週水曜日の週1回、理科と数学で土沢中学校へ行かせていただきました。時間割の構成上、どちらの教科でも同じクラスの担当でしたが、違う教科で同じクラスを見ることにより気づいたことがありました。先生や内容が違うことにより、生徒の取り組み姿勢が全く違うことなど、生徒の様子を見ていて面白いなと思ったことはたくさんありましたが、私が一番興味を持ったのは、数学のグラフ問題は出来るのに理科のグラフ問題は出来ないという生徒が意外とたくさんいるということでした。

確かに、問題文から座標をとってグラフを書いていくことが多い数学、提示されているグラフから内容を読み取ることが多い理科では真逆のことを行っています。しかし「グラフ」を用いているという点では変わりがなく、軸や座標、傾きの読み取り方も特に違いはありません。

にも関わらず出来る・出来ないといった差ができるのは何故だろうというところに私は興味を持ちました。そこでまず理科の時間に生徒にいろいろと聞いてみたところ、数学のグラフは軸のほとんど全てがX、Yで表されていることに対し、理科の場合は単位によってグラフの軸が変わってしまうからという意見がありました（速さ、時間、電流、電圧、質量、温度、バネの伸び、おもりの個数、化合した量…）。数学ならば基本的にXとYだけを考えれば良いのですが、理科ではそうはいきません。それぞれの軸から読み取った値を用いて別の値を導き出さなければいけない場合も理科では多々あります。そのために生徒たちは理科のグラフが読み取れなくなることがわかりました。ちなみにそ

の授業内での理科のグラフ問題に関しては、値の読み取り方を数学と同じように説明をしていくとその場では解決することができましたが、理科と数学のグラフの捉え方について、今後とも考えていかなければならない課題だと思いました。

そのような課題をふまえて、別の学校でのある時間の理科と数学の授業を見学したときに、数学では関数の問題としてしかグラフを使用せず、理科ではある程度グラフの読み方は既に分かっているものとして進められていることがありました。それだけを見ると理科と数学でグラフは別物のように私は感じました。ここでもう少し教師間で連携がとれていると生徒の理解度も上がるのではないかと思います。

また、私はこの度、神奈川県教員採用試験に合格させていただき、それによってもボランティアに参加しているときの自分の視点の変化を感じました。以前は担当教諭が授業を行っている傍ら、授業に付いていけない生徒へのサポートが主な活動内容でした。しかし今回採用が決まってからは生徒よりも担当教諭の言動の方に注目することが多くなりました。特に私自身があまり得意ではない分野に関して、導入をどのように行っているか、どのような例を挙げているか等、土沢中学校の宮城先生の授業は勉強になることがたくさんありました。

そして理科の中でも私があまり得意ではない物理・化学分野のグラフを使用する授業はとても参考になりました。前述したように、理科のグラフが苦手と考えている生徒が多い中で、何が軸になっていて必要な値をどう読み取るのかを限られた時間の中でできる限り丁寧に指導しており、とてもわかりやすい授業で、クラスの大半の生徒が教えられた通りに解いていくことが出来ていました。

これらのことから考えられるのは、理科のグラフの読み取り方を初めだけでもしっかり説明すること、軸の値が変わっても読み取り方は変わらないということを教えることだと思いま

す。実際に自分が教壇に立ったら、理科だけではなく他教科との繋がりも考えながら教えることを心掛けていきます。

15. すべての生徒が参加する授業と教師としてのやりがい

化学科 4年 四ツ家大祥

土沢中学校にて、理科と数学の教科の支援、土曜日の数学の補習

学校ボランティアを通じて私にとって印象深かった体験や感想、今後の課題について以下の2つにまとめます。

① 中学1年生の数学の授業を今回、始めて見ました。そして一次関数についての演習をしていてクラスの3分の1ぐらいの生徒が授業に参加していない状況を見て驚きました。生徒を見ていて思ったことが一次関数についてあまり理解できていなく、ある生徒に方程式について聞いたら理解していませんでした。そこから考えたことが前の段階で躓いていて“わからないことをわからないままにしている”そして考えることをやめていると思いました。すべての生徒が授業に参加するように以下の2つのことを考えました。

まず、教育実習中、私は同期の実習生の数学の授業を何度か見ました。そのときも同じ中学1年生の授業を見て、授業の演習問題を解いている姿を見て全く分かっていない、小学校の基礎的なことを理解できていない、といった生徒は1クラスに数名見うけられました。しかし、授業がわからなくてもひたむきに生徒がノートをとっている姿が印象的でした。そこから感じたことが実習校ではノートが授業点として評価に入っていたため、わからない生徒も一生懸命にノートを板書していたのではないかと考えます。このように外発的な動機づけにて評価してあげることでやる気にさせることも大切なので

はないかと考えます。

次に、私は現在、受講しているかながわティーチャーズカレッジの研修で生きる力を育む～「思考力・判断力・表現力」の育成をめざした授業づくり～というテーマで研究と実践を行っている教育課題指定研究校のとある中学校にて集大成となる授業を見ました。その中で今、神奈川県で注目されているすべての授業でホワイトボードを使う授業を見ました。導入でその事柄について学びたいと思わせ、そのことについて班で考えてホワイトボードにみんなで意見を出し合う。そしてまとめ、クラスで発表する。その後に模造紙にまとめ教室の外に展示することで学級を超えて発表する。という授業を見て生徒に課題意識を持たせて全員で考えさせるということでわからない生徒でも参加し、互いの考えや意見をぶつけることで、少しでもできるようになれば、「より学びたい」、「楽しい」という感情が芽生え、すべての生徒が授業に参加するのではないかと考えます。

② 土曜の補習について、私は数学を見ていて補習は今年の2月から見ていたのですが、2月ごろに当時、中学1年生だったとある生徒がいました。その生徒は数学がそれなりにできる生徒だったため「どうして補習に来るの？」と尋ねたら「部活の先輩が嫌だから部活を休む口実のため」と答えられました。正直、そのときに私はそれなら別の数学ができない生徒を見てあげたいと思いました。そして最近、久しぶりにその生徒が数学の補習に来るようになったため同じ質問をしたら「テスト近いから内申が入試に関係するし、テストを頑張りたい。」と答えられ、すごく嬉しい気持ちになりました。約1年間数学の補習のボランティアをする中で、最初は部活を休むために補習に来ていた生徒が試験のために頑張りたいと1人の生徒の成長する姿をみてやりがいを感じ、数学の補習のボランティアをしてよかったと思いました。

そしてこれらの経験を励みに今後、より様々

なことを日々学び、生徒から見て良い先生となれるように様々な面で頑張りたいと思います。

16. 話しかける勇氣

情報科学科 3年 松井公拓朗

私は土沢中学校でボランティアをさせていただきました。実際に学校ボランティアを経験して思ったことについて書いていきます。

まず、私が一番印象に残ったことについて書きます。私は以前にも学校ボランティアをさせていただき、そのときは土屋小学校にお邪魔させていただきました。小学校では、生徒達は初めて見る人に対して、とても好奇心旺盛で積極的に話しかけてくれました。また、自分の好きなことや身の周りのことについて意欲的に話してくれました。このことに比べ、今回は中学校ということで生徒との関わり方が全く異なりました。初めてクラスに入ったとき、元氣よくあいさつはしてくれましたが、なかなか積極的に話しかけてくれませんでした。授業中も分からないところがあってもなかなか質問してくれませんでした。そして、私は自ら生徒に話かけてみることにしました。その結果、一度話がはずむと生徒達は心を開いてくれるようになりました。

実際に小学校と中学校という現場で活動して、やはり中学生は小学生とはまた違い、大人になったのだと思いました。大人になることで、初対面の人と会話することが恥ずかしくなったり、少し先生をからかってみたり、問題の解答が間違えたことに対して恥ずかしく思ったりと多くの違いを直接感じ取ることができました。

二つ目に、実際に授業に関わってみて感じたことについて書きます。私は将来、数学の教員を目指しているので数学の授業の見学かつ補助をさせていただきました。初めて授業を参観したとき、とても静かだったので、小学校との授

業風景の違いに圧倒され、私は受け身の姿勢となっていました。迷っている生徒がいたら助けてあげようと思って授業に挑んだのですが、その気持ちとは裏腹に、全く生徒と接することができませんでした。その日は結局生徒と上手くコミュニケーションをとることができずに終わってしまいました。私はどうにか先生、生徒の役に立ちたかったので、どうしたらよいか考えました。結論的には、自分自身が緊張した顔をしていたら生徒も話しづらい、私が心を閉ざしていたら、生徒が心を開いてくれるはずがないと思いました。そして、次回から自分自身に余裕を持たせようと努力しました。意識して授業に挑み、生徒に話しかけてみました。分からない所を教え、生徒が理解してくれると、自分の自信にも繋がり相乗効果となりました。最終的には、授業時間外にも、分からないところを聞きに来てくれ、とても充実した学校ボランティアになりました。

ここから感じたことは、まず教師から勇気をもってコミュニケーションをとりに行く。教師が待っているだけでは、生徒との距離は遠くなるだけだと思う。そして、生徒に「わかった」と言ってもらえることは本当にうれしく、自信に繋がり、もっと教えてあげたいと思う。そして、生徒から信頼してもらい、分からないところを質問しに来てくれる。このサイクルは先生としても、生徒としても充実して学校生活を送るために必要なことのひとつではないかなと思いました。

今回学校ボランティアとして現場で活動できたことは、本当に貴重な体験だったと思います。この貴重な体験から学んだこと、感じたことをしっかり自分のものにして、これからも教員を目指して頑張っていきたいと思います。

17. 授業内で取り組むこと

情報科学科 3年 松島 勇太

土沢中学校に学校ボランティアに行きました。基本的に火曜日の3校時に3年生の数学の授業補助、4校時に2年生の数学の授業補助をしました。授業補助なので授業内で生徒が困っていることがあれば対応したり、問題演習するときにどう解けばよいのか分かってないようであればヒントを与えたり、どう考えれば良いのか教えたりしました。

授業内でいくつか印象深かったことがあります。今回、学校ボランティアに参加して一番驚いたのはある日の中学2年生の数学の授業の時です。授業の内容は「合同」でした。このとき最初に先生から「合同な三角形を2つかけ」という指示がありました。合同な三角形をノートにかいたりするのにコンパスや分度器が必要です。しかしこの時、生徒の半数以上がコンパスも分度器も持ってきていなかったのです。「先生、コンパスもってない」「分度器忘れたー」なんて言葉が教室を飛び交いました。もちろん先生は持ってくるものとして黒板に「コンパス、分度器」と書いてあります。それにもかかわらず生徒の半数以上が忘れていたのです。先生も怒るのと同時に呆れてもいました。結局、生徒は先生にコンパスと分度器を借りて三角形を2つかきました。たった2つの三角形をかくだけで10分以上の時間がかかってしまいあまり授業が進むことはありませんでした。授業で必要な道具がなければ授業を進めることが出来ないのです。しかし、教室に飛び交った言葉から生徒は忘れ物をしてしまったことに対して「ああ持ってこないといけないのに忘れてしまった」という反省の様子は私が教室を見渡した限りではありませんでした。私はこのとき忘れ物に関しては日ごろから厳しく指導していく必要があるなと思いました。せっかくの学ぶ時間なのに学ぶことが出来ないのです。本当に

もったいない。私が教師になったら忘れ物に関して徹底して指導していきたいです。

もう一つ印象に残っていることがあります。それは先生がとても生徒の理解が進むように授業の工夫をしていたことです。例えば三角形の合同を証明する授業について述べると、まず証明する流れを説明していきなり生徒が完全証明（証明の過程をすべて書く）をするのは難しいからまずは穴埋め形式で証明をやる。穴埋め形式の証明を繰り返しやってある程度生徒が慣れてきたら証明の過程をすべて書く完全証明をする。いままでの数学は「 x の値を求める」などある数値などを求めることがほとんどで説明（証明）することはなかったので証明というのは生徒にとってとっかかりづらいところだと思います。しかし生徒がちょっとずつステップアップできるように工夫してあげることによって生徒はスムーズに取り組めることが出来て理解しやすくなると思います。

ほかにも黒板で合同な三角形などをかくときはフリーハンドではなく正確に合同になるようにコンパスを用いてかくことで生徒が視覚的に合同であることが確認出来ていました。また板書も無駄なことは書かれていなくてスッキリと見やすい板書でした。生徒の様子を見てみるとほとんどの生徒は板書をそのまま丁寧に書き写していたので後日見返してみた時に「ああそういうことか」と思いました。以上のようにあらゆる部分で先生の工夫を垣間見ることが出来ました。

3年前期は小学校へボランティアに行き、今回（3年後期）で中学校にボランティアへ行きました。やはり小学校と中学校では全く雰囲気異なるものでした。しかし、共通していたことは児童生徒のために先生が一生懸命頑張っていたことです。私も教師になったらこの学校ボランティアの経験を活かし生徒の事を第一に考えて生徒を人間として成長させることが出来たら良いなと思いました。

18. 私の考える教師像

情報科学科 3年 中島嵯恵子

土沢中学校のボランティアに行ったら私が印象深く残ったことは、先生と生徒の距離感です。近すぎる訳でもなく適度な距離感を感じました。授業中には先生の問いかけに対して自然と生徒の声が返ってきて、生徒が授業に参加している様子がよく見られました。手を挙げて発言させるというよりも自発的に授業に取り組めるような授業形態でした。先生と生徒で授業をつくり上げていく感じで生徒からしてみれば参加しやすいものですし、印象に残るものだと思います。そういう授業ができるよう私も力を付けていきたいと感じました。

もう一つ私が力を付けたいと思ったことが授業の展開です。途中計算を省略していた際にそれを見て困っている生徒がいました。ほとんどの子ができていて単純な計算式でも中にはできない子もいるのだと再認識しました。授業中、そのたった1行が分からなくて不安になる子、やる気をなくす子、分からなくても分からないと言えない子様々だと思います。いろんな生徒がいますが誰が聞いても分かる、生徒の目線に合わせた分かりやすい授業ができるようになります。また机間指導だけでは補えない部分を補修に当てるなどの方法を聞きました。授業はクラス全体が進みますが個に応じた指導方法も考えていきたいと感じました。クラスのどれくらいのレベルに合わせて授業を展開させていくか、これはまだ私の課題です。

今までは生徒側でしたが教師という立場から考え、改めて気付いたことがあります。それは教師の“発言力”です。授業中、先生の解答が間違っていることがありました。何人かの生徒はそれに気付いていましたが指摘する生徒はいませんでした。私は理由を聞いてみたところ“先生が言うことだから正しいと思った”“自分の解答には自信がない”という言葉が返ってき

ました。確かに私が生徒側でも同じことを思います。学習面だけではなく生活面や部活動においても同じことがいえます。教師の発言が生徒にとっていかに強く、影響を及ぼすのか考えさせられました。同時に、自分の言う言葉には責任をもち、気を遣わなければならないとも感じました。教師だって間違えてしまうことはあります。そういった時に生徒が指摘してくれるような関係を築きたいですし、発言力が強い分、生徒の心に残るような言葉をたくさん伝えていきたいです。私自身、先生の言葉に大きく影響を受けて今の自分がいます。素敵な先生と出会えたからこそ教職の道を選ぶことができましたし、教師になりたいと思うことができました。一人の人生と深く関われるやりがいのある職業と同時に責任のある立場でもあります。自分が受けたように感動や影響を与えられる教師になりたいと感じました。

次に自分自身変わったことがあります。それは相手の立場になってよく考えるようになったことです。ボランティアに行くと生徒と一緒に授業を聞いたり、生徒のノートや表情を見たり、実際に話してみることは私にはとても刺激的で多くのことを吸収することができました。また現場で働く先生と話す機会を持てたことは今までになかった経験です。教師という職業を間近で感じることができとても貴重な体験でした。模擬授業をしても、以前は自分のことで精一杯だったのが今では少しだけ心に余裕をもって取り組めるようになりました。この余裕で生徒の表情を見たり、授業が分かりにくいのか、速くないか等、生徒の立場になって考え、自分の授業を見つめ直すことができました。教職関係だけではなく私生活においても相手の立場になって考えることは多くなり、思いやる気持ちを強くもつようになりました。相手を思いやる気持ち、すなわち生徒を思わなくて良い授業はできませんし、教師としても不十分です。私は良い授業をするためにどうすべきか、教師としてどうあるべきか原点に帰って考

え直すことができました。ボランティアを通して教師という立場においても人間としても大きく成長できたと実感しております。

19. 新たに变化した意識

情報科学科 2年 大月あゆみ

土沢中学校に9:10-11:10の間学校ボランティアに行き、1年で英語、3年で数学を主に教えた。主に英語はボランティア期間中のほとんどは、先生が授業で使用するための英単語づくりとたまに授業への参加。数学は、テストの答え合わせの手伝いと授業へ参加し、生徒が問題を解くための補助を行なった。

まず今回、私は学校ボランティアに2度目の参加をしました。前期の時にも参加はしたのですが、その頃は本当に上も下も分からないような状況で、自分に任された役割をこなすことに手一杯だったことを覚えています。そのため、授業の補助をしていても生徒の分からない問題の解き方を教えるという1点のみに囚われて、他の事にほとんど気を使う事が出来ていませんでした。

そもそも、今回このような前期の失敗に気がつくことが出来た理由が、学校ボランティアに慣れてきたということもありますが、前期よりも多くの教職課程をとっている人たちと一緒にボランティアに参加出来たということが最も大きいのではないかと思います。私の前期では気づくことが出来なかった細かい事に後期で多く気づかされました。

例えば、些細なことですが、「生徒に対して教えるときはしゃがんで目線を合わせたほうが威圧感が出ない」だとか「教える時に教室をあまり歩き回ると生徒の板書の邪魔になる可能性がある」など、他にも色々ありますが多くのことを気づかせてくれました。これらの得られ

た多くの経験は私の意識に対してまた少しの変化をもたらしてくれました。これらの変化は、私がボランティアに慣れてきたということも重なり、今回はより生徒との距離を縮める事が出来たのではないかと思います。

さらに、前期に私は教師を目指してゆく上で最も重要なことは、「生徒と教師との間の経験」ではないかと言っていました。しかし、今回同じ教員を目指す人たちと関わることで得られた変化で、生徒と教師だけではなく、教師と教師の関係も非常に重要であると思われました。私は、まだ教師ではありませんが今の段階でも同じ教職課程の仲間から学ぶことが多くありました。きっと、自身が教師になったとき同じ教師を見て得られる経験は非常に重要になってくることでしょう。私たちは教師を目指していますが、その中で、ひとつの事に固執してしまうのではなく、もっと広く大きな視野で周りを見て、「知識」や「経験」を吸収して行かなくてはならないのだと思います。

今回、私の中で変化したことは本当に沢山ありますが、最も変化したのは私の教師になりたいという意欲です。本当に教師はなるまでもなってもからでも本当に大変な仕事であると思われましたが、同時にそのやりがいに気づかされました。それは、「人を育てる」ということです。私の、小中高の先生、特に私の中で印象に残っているのは小学校の先生です。この先生は非常に厳しい先生ではありましたが、今思うと、この先生のおかげで教師を目指すという思いが湧いています。いわば、私を育ててくれた第二の親と言ってもいいです。先生は「人を育てていた」のだと思います。「人を育てる」ことの重要性、これも今期の学校ボランティアでふと教えている先生をみて気づかされたことである。

これからは、もっと広い視野をもって教師を目指して行きたいと思う。

20. ホームページ作りで学んだこと

情報科学科 2年 渡邊 美優

今回は、土沢中学校のホームページ更新の手伝いをしました。更新の手順を確認した時は、使い慣れたソフトだったため、簡単にこなすことができるだろうと思っていました。しかし、実際に活動が始まると、そうではなく、毎回毎回試練の連続でした。更新の作業で一番多いことは、学校だよりなどのプリントの更新ですが、これが回数を重ねてもエラーがでることがあり、どうすれば直るのか分からずに、苦労ばかりでした。また、何とか更新できて安心してしまい、次の活動日に、同じ活動内容なのに手順を忘れしまい、やはり手詰まりしてしまう、ということもありました。他にも、学校側の要望に答えるように色々な作業をしました。例えば、校歌の挿入や、新規ページの作成などです。

校歌の挿入は、なんとかなるだろうと考えていました。しかし、音源はMDから取ってホームページに使えるようにしてほしいと言われたときは、これはどうしたものかと悩んだり、方法を調べて試したりしました。やっとのことでMDの音源をパソコンに取り組み、ホームページに使えるよう、データの種類を変え、やっとできたと思ったら、学校側の要望にそぐわなかった形になってしまい、やり直しという事もありました。どのように直せば良いのか。他の学校のホームページを調べたり、持っていた本を使ったりと、ホームページ作成の勉強をして、なんとか作ることができました。その後も何回か、方法を変えて試して、ようやく納得のいく形となりました。

新規ページの作成は、ある日突然言われました。ある中学校に、日々のちょっとしたことや行事などについて書き記すページがあり、同じようなものを作ってほしいとのことでした。土沢中学校とその中学校では、ホームページの作り方が全く違っていたので、どのような形のも

のを作れば良いか、友達と相談したり、先生に聞いたりしました。また大きな問題があり、今までの作業は、先輩が作ったページに、つまりすでに形のあるものに、新しい便りや写真を追加していくという形でしか、携わっていませんでした。そのため、どうしたら今までのホームページと違和感無く作れるのかと、悩みに悩みました。最初のページを作るのに、3時間も掛かってしまい、またそれでも納得のいくものが出来ずに、先輩抜きで本当に作れるのかとさえ思いました。後日なんとか完成したのですが、先輩が今まで作ってくれたものと違うものになってしまい、どうやったら同じものになるか、ページの見比べを行いました。

このような事を9月から12月まで行いましたが、生徒との関わりは皆無でした。しかし、生徒との関わりあることだけが、先生の仕事では無いと思います。学校のために、生徒に見えない所で活動するのも、先生の仕事のひとつだと思います。また、先生になるためにやった方が良くということで、活動してきましたが、今になって、この学校ボランティアは情報の知識を得る良い機会となっていました。具体的に挙げると、HTMLという学校のホームページを作るために必要なものがあります。昨年、授業の一環として、また子供の頃から興味があったので私的に、そのHTMLに触れていました。そのため、前述したとおり、更新作業はそんなに難しくないだろうと高をくくっていました。しかし、要望通りにするためには、持っている知識だけでは不足、インターネットや、本等で調べなければなりません。作業中は必死になっていたため、あまり感じなかったのですが、もしホームページ更新のボランティアに参加しなかったら、恐らく学ばなかったこと、知らなかったことがたくさんあります。

そう考えると、学校ボランティアを通じて、多くのことを学べたと思います。もし来年もホームページの手伝いができるのなら、学校のため、また自分の知識を増やすため、進んで参

加したいと思います。

21. 当たり前の大切さ

情報科学科 2年 小林真理子

土沢中学校で3年の数学の授業とホームページ作成の情報の学校ボランティアに行ってきた。3年の数学の授業は水曜日の1限の授業に参加し、情報のホームページの作成は同じ水曜日の午後の14時から行い、その時の作業内容によって終わる時間は変わりましたが、大体が16時半に終わるような作業内容でした。数学の授業においては、問題において悩んでいる生徒に声をかけたり、ミニテストの解答を作成させてもらったりしました。情報においては、元々先輩が作っていたホームページに24年度に行ったことや結果などを更新していきました。数学のボランティアと情報のボランティアは共に私にいろいろなことを学ばせてくれました。

今回のボランティアは私にとっては初体験のことでした。ボランティアは今まで参加してききましたが、学校ボランティアは今回初めてのことでした。私は人見知りがひどく、最初の頃は学校でのボランティアをするにあたって、やってみたくらいという気持ち以上に不安があり、自分は3ヶ月もの間を上手く出来るのか不安ばかりでした。特に数学の授業のボランティアにおいては最初にボランティアに行った時に、担当の先生に理解していない生徒に声をかけるように言われました。私は、どのように声をかけたら良いのか全く分からず、最初のボランティアは不安でいっぱいでした。でも今回私が行ったボランティアには、以前からボランティアに行っていた先輩と一緒にしました。そのため私は最初、先輩の動きを見ながら動いている状態でした。声をかけるのも先輩が声をかけ始めてからとボランティアとして全く上手く出来ていないと反

省ばかりしていました。

でも、ボランティアに行って3回目の時でした。私がいつものように問題を解いている生徒を見ながら教室を歩き回っていると、一人の生徒が分からないところがあると聞いてきました。私は嬉しくて、自分でも役に立てるのかもしれないと、自信も出てきました。私はその生徒に分からないところを聞き、解き方を自分なりに精一杯教えました。その生徒は理解してくれたようで、難しい顔をしていたのがパツと変わって問題を理解出来た表情に変わり、すらすらと問題を解いていました。その様子を見た瞬間、私は役に立てた気がしてそれまで以上に嬉しくなりました。そして、その生徒が解き終わった後に正しく出来ているかを聞いてきて私がそれに「出来ていると思うよ」と言うと、嬉しそうに「ありがとうございます」と返してくれました。私はこの時から先輩を真似るのを止めようと思えました。自分なりの教え方で理解してくれて、嬉しそうにしてくれました。このことで私は自分一人でも出来ることはあると思えたからです。

最初の頃の私は見て真似るといった行動をして何とかやっていたので考えていませんでしたが、もしも教師になれた場合は先生のお手本となる人はその教室には誰もいません。今回のように誰かの動きを真似て行動することは絶対に出来ないし、やってはいけないと思いました。今回ボランティアにおいて私は教師にとって当たり前であることを生徒に気づかされました。私はこんなことが当たり前だから大丈夫という考えは間違っていると思えました。当たり前が難しい時もあります。今回のボランティアはその当たり前の大切さを改めて自覚出来たいい機会だったと思えました。

2.2. 生徒が私に教えてくれたこと

情報科学科 2年 中尾 真穂

今回私は土沢中学校へ学校ボランティアに行き、そこでほぼ毎週水曜日と金曜日の1時間目、9:10～10:00に3年B組の数学を、また水曜日に関しては約5時間目、13:40～14:50の時間を使って情報（ホームページの更新）を行わせていただきました。

学校ボランティアに行く前までは、アルバイトで個別塾の講師や地元で小学校ボランティア（特別支援学級）を行っているので内心「初めての中学ボランティアといえど人数が2人から30人くらいに増えただけで何とかなるのではないか」と正直軽い気持ちでした。

実際に土沢中学校へ学校ボランティアに行ってみると予想とは異なり、主に教師が生徒に授業をしているのを見学しているだけの日々が多かったです。そこで生徒がどのような場面で手が止まってしまうのかを窺ってみていたのですが、多数の生徒が、教師が板書するまで問題を解かずに構えたままであったのと、中学の問題ではあるが、内容をよく見ると小学校で学んだ分数や小数、そして約分などの割り算があまり得意としない生徒が多かったです。しかし、手が止まってしまっている生徒の中でも自力で解けそうな雰囲気ではあり、あと一歩というところで時間切れなど、とても惜しい人もいました。

大変だと感じた点は教えるタイミングでした。あまりにも見守っていると教師がその問題の回答を始めてしまうし、あまりはやすぎてしまうと今度は生徒の学力に繋がらないどころかやる気さえも奪ってしまうからです。実際に生徒から教師のほうに「なんか常に見られていて嫌だ」という話があったらしく、どのくらいを目途に教えればいいのかを見極めるのが大変でした。

塾と学校で異なる点はやはり時間のかけ方

とこの時感じました。学校だとやはりこの日にどこまで進まなければならないという意識が強くなり、出来る生徒と出来ない生徒の差が出てしまっている先にある試験、とくに受験などで教えておきたいことを多く伝えなければならないからです。塾でも生徒に教えなければならない立場であることは変わりないですが、塾ではその生徒が苦手としている単元を選んで行うので、ほとんどが学校を基礎としています。ですから学校で授業を、それも1対多数で教えなければならない事はとても大変なことだと気付きました。

また小学校と中学校と比較しても、私が小学校で受け持たせてもらっているクラスが特別支援学級であることも関係しているかもしれませんが、授業中での生徒との接し方が異なると感じました。つまり、対象が小学生である場合、まだ規律などの理解が不十分であるため、生徒と触れ合いながら授業を展開していくことが多かったのですが、対象が中学生であると大体の規律はもう身につけているので学習面だけの触れ合いになりがちでした。

私は土沢中学校へボランティアに行き、実際の授業を見学し、問題でつまづいている生徒へアドバイスすることで、教師にとって生徒がどのような点を難しいと感じ、どのような教え方を受ければ納得するのかなどを見る必要があると学ぶことが出来ました。だからこそもっと学力を身につけ、その生徒にあった問題の解き方を教えられよう教師になりたいという気持ちになることが出来ました。

23. 理想へのきっかけ

情報科学科 2年 丸山彩恵子

土沢中学校で、2・3年生の授業内学習支援、2年生の土曜学習会に参加させていただきました。どちらも数学の内容での参加でした。主に

授業内での支援は練習問題に対するアドバイスや、先生の授業の見学でした。今回は授業の数学教科の指導に限らず、生徒指導の実態についても目にする機会がありました。また、教科指導に関しては図形の合同証明などを中心に扱っていた為か、定理を押し付けるのではなく、そのプロセスを優先した授業進行を生徒であった時と違った受け止め方が出来たように思いました。土曜学習会では2年生に一次関数のプリントを利用して、つまづいた事を一緒に考え支援するという活動を活動内容としました。

今回の活動において自分が大きく成長したとは思えませんが、これから実際に教鞭をとるまでもう一度やっておきたいこと、知っておくべきことに気が付く事が出来た活動だったのではないかと思います。今回の活動に名前をつけるのであれば「成長のきっかけ」となるのではないかと思います。数学の教科指導では、定理の押し付けにならない様に、その定理が成立するまでの過程・証明を教師自身がしっかりと理解して授業に望まなければならないということを考えさせられました。先生は淡々と三角形の合同定理が成り立っていることを作図を通して生徒に伝えていました。聞いているだけであれば当然のように思いますし、それが合同定理と結びつくことに気が付かず流してしまいそうな内容でしたが、これらを結びつけて少しでも生徒の中に納得という形で残る様に工夫されていました。大学の講義でもあまりに理解しがたい内容や、興味の持てない授業進行では眠くなりますし、途中から話の意味など分からなくなってしまう。しかし、土沢中学校の先生は生徒に理解し易い方法・流れをととても工夫なさっていて、それを見せていただけたという体験は貴重でした。この時、教科の指導ではそれに特化する以上そのプロであるという自覚と、それに見合う技術・実力を身につけなければならないと思いました。決して簡単な事ではないということも十分に理解しているつもりですが、これを乗り越えてこそ教師と言って良いの

ではないかと思いました。

また、生徒の実態について少し知る事が出来たように思います。図形の作図のために定規を持参することが必要でした。持ってきているのは良いのですが、それに光をあて、顔を狙って反射させていました。場合によっては失明もありうる行為です。それを何度も止めるように注意されても続けていました。自分の行いがどのような結果を生んでしまうのか全く気付いていないようでした。中学生の時私達も同じ様なことをして、同じような指導を受けた事がありましたが、尚も続ける生徒はいませんでした。中学校を卒業してから5年近くになりますが、こんなに変わってしまうものなのかと思いました。教科書の生徒も、模擬授業の生徒も、かつて自分たちが生徒であった時の様な生徒もいない。そして本当に教師になった時には今の生徒のような生徒はいないのであると言うことを考えさせられました。その時教師としてどのような対応をしていけるのだろうかと考えさせられました。

ここまでで述べたことは当たり前で、出来て当然の内容であることは重々承知ですが、とても難しいとも思います。単なる教師ではなく理想とする教師になるために今回の活動で気付かされたことを活かしていければと思います。

2.4. 誰が先生？

情報化学科 2年 水戸 紘子

学校名 土沢中学校

内容 数学、英語、理科の授業や補習の補佐

「先生、ここ・・・あ、先生じゃないや。」
今期の活動でよく生徒に言われた言葉だ。「ん？そしたらなんて呼べばいいの？」と続けて言い、最終的には「ミタさん」と呼ばれることに落ち着いた。

先生でなければ何なのだろうとよく考えさせられた。ボランティアとはいえ、私も含め他の人たちも勉強を教えることを中心として動いている。授業中に後ろに立っていて何か質問があれば教えに行くというスタイルなのだから先生に違いない。不思議に思いながら他のボランティアの方の様子を見た。やはり先生とは呼ばれない。しかし呼ばれる人もいた。それは非常勤の先生とボランティアスタッフの方だった。何が違うかといえば単純に年齢が違うだけの話かもしれないが、もう少し考えてみることにした。

年齢が若いからといって先生にならない訳ではない。実際に塾の先生の中には若い人が多くいる。彼ら先生と私たちボランティアの共通点はやはり勉強を教えることだろう。他には生徒の相談に答えることだろうか。いずれにしても勉強がかかわってくることに違いない。対して共通しないところは授業を行うか行わないかにある。私たちは授業をするのではなく基本はサポートするのみである。他には生徒と休み時間を過ごさないか過ごすかがある。休み時間にもなお勉強を聞きに来る子は塾の先生相手にも居るのかもしれないが、普通の会話はおそらくしないことだろう。そして最後にお金に関わるか関わらないかがある。少し前に生徒にこんなことを言われた。「ただ働きなんですよ？どうしてやるの？」それに対して私はそこそこに人間性のある対応をしたような気がするが、生徒にこのような関心があるのかと感心した。簡単に列挙するとこんなところだろうか。ボランティアスタッフの方のことを考慮すると、先生と呼ばれるためには休み時間を勉強以外ではそれほどまでに過ごさず、お金を稼いでいる（ように見える）人。あまりに酷いのではないだろうか。実際に休み時間に生徒と過ごす先生も居れば単純に人に何かを教えることが好きで先生になった人も居るはずだ。先生の条件は探しにくいので先生ではない条件を探してみる。授業では進行をすることなく勉強のサポートのみを

して、休み時間を一緒に過ごし、お金を稼いでいない（ように見える）人、となる。最高にボランティアの鑑のような人である。私はお金を稼ぐのではなく経験を稼いでいるためここまで最高の人になれるわけではないが、どうしてここまで“いい人”を先生と呼ばないのだろうか。

先生と呼びたくはないのではないだろうか。わざわざ先生と呼ぶことを避けたいのではないだろうか。そういった疑問が思い浮かぶ。つまり学校ボランティアの人には“先生ではない誰か”というポジションに居て欲しいのではないかと思い始めたのだ。しかしそれは生徒にとって良いことなのだろうか。先生が居てくれたほうが安心して勉強することができるのではないだろうか。そこまで考えたときにふと「先生」と生徒から呼ばれた。漢字の質問だったがそんなことより今度は“先生”という言葉に違和感を持った。3年生だった。よくよく考えてみれば3年生はほとんどが「先生」と呼ぶ。先生の需要が高まったのだとわかった。途端、先生という言葉に重みを感じた。

25. 教師の役割

化学科 3年 柿澤 拓也

私は土沢中学校ボランティアに行かせていただきました。主に1年生の理科の授業内支援として入らせていただいたのですが、その中で座学はほとんどなく、実験における教師のサポートおよび生徒への補助をさせていただきました。

座学の授業は1回しか入っていないのですが、土沢中学校へのボランティアは初めてだったので、何をしようのかつかめず、授業中に生徒がわからないところを教えてあげるといった学習支援というよりは生徒と一緒に先生が先生の授業を聴いていたという感じでした。ただ、そんな中でも実際の中学生に対し授業している

ところを見ることができただけでもとても参考になり、教科教育法などで模擬授業を行っていましたが、大学では所詮授業を聴いているのは生徒役の大学生であり、授業もちゃんと聞いてくれるし、質問をすればある程度の答えが返ってきます。そういった環境でしか教師側に立つことがなかったので、土沢中学での1回の座学の授業は実際の中学生を相手にしたときに自分がどのように生徒と関わっていけばよいのか、実際の生徒だったらどういう反応をするのかを考える良い機会になりました。

授業を見ているとやはり、大学生が相手のときは全然異なっていて、土沢中学校の1年生はどこか落ち着きがなく、なかなか集中できない子も多くて授業展開が思うようにいかないようでした。これは私が実験の授業に入るほうが多かったのにも繋がるのですが、理科の授業の中で特に実験というのは生徒の興味を引きやすいという一方で、大勢の生徒が一齐にガスバーナーを使って加熱したり、取扱いに注意が必要な溶液を使ったりするので落ち着きがないと大変危険で、教師はより一層生徒に目を配らなければいけません。

1年生は座学でもなかなか難しく、やはり実験を行うとなると、教師一人では手に余るようで、私が中学校に行っていた時間はたまたまボランティアの方が多かったので、実験を行うことが多かったです。

しかし、基本的に教師や私を含め4人で実験を行っていたのにも関わらず、それでも目が行き届かなくて、実験中にふざけてしまう子や試薬を舐めてしまう子、器具の破損等危うく怪我に繋がるような場面が何度もありました。

私の通っていた中学・高校、その他の学校でも授業補助の教師やボランティアがいるというのは珍しいことだと思うので、もし自分1人でこういったクラスに対し授業や実験を行わなければならないとなったらどのように対処して行けばいいのか、うまく授業展開できるのかとても不安になることが多かったです。

ボランティアを通してそういった問題に対する対処法というのを発見できればよかったのですが、今回の中学校ボランティアでは何回回数や時間がなかなかとれず週に1回、短い時間でしか行くことができなかったこともあり、具体的に何を学ぶことができたのかは自分でもまだ見だしていませんが、現状の中学生を目の当たりにすることで、教科教育法における模擬授業と実際の授業での違いと、授業を行うだけが教師の役割ではなく、中学校においては生徒指導との関連性の重要さに気付くことができたと思います。

ボランティア全体を通して、学べたことは少なかつたかもしれませんが、短い期間でも名前を憶えてくれた生徒もいて、実験中などは積極的に私に質問などをしてきてくれる子が多かつたので、とても嬉しかつたです。生徒との対話は改めてとても重要なものであると実感しましたが、クラス全体と一度に対話をしようとするのは大変難しいとわかりました。なので、全体ではなく生徒一人一人と行っていくことで、教師でも話しかけやすい信頼関係を築きやすく、そうすることで学習面での質問もしやすくなるので生徒の積極性も増すのかなと思いました。

26. 立場が変わって気付けたこと

化学科 3年 小嶋 啓喬

私は土沢中学校に3ヶ月間ボランティアにいかせていただきました。主に理科の授業や実験のサポートとして、1年生の酸素や二酸化炭素の発生、水溶液の再結晶などの演示実験や生徒実験の補助として水溶液の作製や配付、ガスバーナーの火力の調整、次の作業の説明などをさせていただきました。そのほかには理科の授業を参観したり、1年数学の1次関数の授業の補助や総合的な時間で発表に使うPowerPointの作

製時にPowerPointの使い方やアニメーションをつかった強調などを教えたりしました。

今回のボランティアを通して私が印象に受けたことは、中学1年生は何をするにも落ち着きがないということです。これは特に驚いたことのひとつです。中学1年生は良い意味で好奇心が旺盛で、何事にも楽しめる心を持っているように見えました。しかし、それが原因で説明を聞いていない、実験試料を勝手に舐めてしまう、実験器具を割ってしまうなどといった事柄が多発する有様でした。このことには先生も手をやいているようで、生徒実験ではボランティアのアシスタントが3人入り、先生も含めると4人で9班を分担する形で行いました。単純に考えると1人で2班を見てまわれば上手くまわせるのですが、それでもなかなか上手くいかないのが現状でした。もし、私が教師になった時1人で実験を行うことを考えると全く実験にならないのではと不安でしかたありませんでした。

先生方はどのようにして授業、そして実験をより良く遂行しているか、それは生徒達の有り余る好奇心を利用してしてしまうのです。つまり、授業の中や後半に楽しみをいれるということです。そうすることで、生徒達自身が授業を早く進行させようとし、授業に一体感がうまれるのです。具体的な例を上げると、最初40分は教室で授業を行い、残りの10分は実験室でアンモニアの噴水実験をやると授業開始時に生徒に伝えるのです。これだけで、授業の進行具合はだいぶスムーズになったように感じました。この方法は他の先生も使っており、神奈川大学附属中学校の授業参観の中でも見受けられました。

このように先生は生徒が率先して授業参加する環境をつくる工夫をしていて、ちょっとした実験でも生徒達は楽しそうにやるので生徒たちに理科が好きなのか聞いたところ、ほとんどの生徒が実験は好きだけど理科は嫌いと言っていました。その理由としては問題が解けないとい

うのが大きな要因のようでした。私は理科を好きになってもらうには理科の魅力や面白さを伝えるのが一番だと思っていたのですが、実際は理科の面白さは割と多くの生徒に浸透していて、次の段階として理科の考え方やその本質をより完結に教えるなどといったことが必要になってくるのだと感じました。

一度だけ入らせてもらった1年生の数学のサポートでは、アシスタントの人が7人もおり、まずそのことに驚きを隠せなかったのですが、いざ始まってみると数学は特に学力差が出ており、できる子にとっては時間が余ってすることがなくなったり、できない子にとってはアシスタントが1対1で教えてあげないとついていけないといった現状で、アシスタントが7人いても足りないように思えました。特に学習進捗度が遅れている生徒に対しては補習を行うなどの対処がとられており、生徒別の対応の必要性を改めて実感しました。

総合的な学習の時間のPowerPointの作成は私が中学生の時にはなかったことなので、教育課程の変化も実感することができました。この3ヶ月間の中学校ボランティアを通して生徒達の生活環境や、年齢別の思考の変化などを重視した授業構成や生徒指導が必要になってくることを感じ、学ぶことができました。

2.7. 1対1で見えるもの

化学科 3年 横山 怜史

土沢中学校にて、補習授業指導ボランティア（数学土曜コース）と1日ボランティアコースに参加した。土曜コースは12:40～14:40であり、1対1または2での個別指導で、プリントの問題を解かせ、わからないところをサポートした。1日コースは8:30～17:00であり、朝の学活から帰りの学活まで一つのクラスを担当し、授業補助を行った。放課後に、補習指導

として、プリント学習のサポートをした。授業補助は数学、英語、理科を任せられ、生徒の疑問を解決したり、授業に集中していない生徒を注意したりすることで、授業をよい環境で受けられるよう行動した。

私が教壇に立って、クラスに授業するということがなかったので、一人で大人数を相手にするという体験はできなかった。そこで、視点を変えて、補習の個別指導で印象に残ったことを以下に述べる。

1対1は楽である。この文章だけでは語弊があるかもしれない。1対1ならば、一人の生徒に集中して対応できるので、きめ細かなサポートができるという意味である。1対1の利点として、教師がしっかり見守ってくれているという安心感を生徒に与えることができる。1対1でしか話せないこともあり、お互いのことを理解し合うには有効な手段だと感じた。

なぜそう感じたのかを以下に述べる。補習授業指導ボランティア（数学土曜コース）で、せっかくの休日にわざわざ学校に来てくれている生徒に対して、“来てよかった”と思わせることを私の目標とした。大事なことを学習するだけならば、私の必要はない。そんなことは自宅でもできるし、学校の授業でもなんでもよい。土曜日に学校に来てよかったと思わせるには、生徒が示した反応に対し、一つひとつ対応することが重要だと感じた。これは、自宅ではもちろん、学校の授業でもできることではない。実際に生徒を目の前にすると、授業中では見逃していた反応がたくさんあった。それらを一つひとつ拾って解決し、短い時間で信頼関係を築けた。その根拠として、補習時間終了後に、生徒が自ら「このプリントを終わらせたい。」と申し出てきた。土曜日の昼の時間、一般に食事を済ませて眠たくて何もしたくない時間に上記のような発言をしてくれた。“来てよかった”と間接的に言われた一言であり、無事に一つ目の目標は達成することができた。よって、1対1の重要性を感じ、新たな課題が見つかった。1

対1で見えてきたものは、教師に対しても生徒に対してもそれぞれ得をする貴重な時間であるということである。

さて、話は戻って、新たな課題とは何かを述べる。1対1は信頼関係を築くのにとても有効な手段であるが、時間がかかる。この問題を解決するためには、授業で1対1の環境を作ることができればよいと考える。具体的には、授業はクラス全体に語りかけるものではなく、生徒一人ひとりに語りかけるものであるということである。あくまでもちょっとした考え方の違いであり、この考え方の有無で大きく授業展開は変わらないかもしれないが、今まで、教室の隅に消えていった発言が、生徒一人ひとりの心に届くものになると考えられる。

土沢中学校での体験を通して、私の生徒に対する考え方が変わった。生徒という集合ではなく、生徒という一人ひとり、個々の存在であるということが特に印象に残った。当たり前のことだが、当たり前のことほど忘れがちである。今回は当たり前のことを体験の中で実感できたので、なかなか忘れることはないだろう。体験できた幸せをかみしめたい。

28. 「大人」として

化学科 3年 続橋 直弥

自分は、毎週月曜日に土屋小学校、水曜日に土沢中学校で学校ボランティアをさせて頂きました。どちらも、行くたびに新しい発見や学べることがあり、何より楽しく活動させてもらったのでいつも生徒たちに会うのが楽しみでした。前回、小学校のことについて書いたので、今回は土沢中学校のことを中心に書こうと思います。

土沢中学校での活動内容は、生徒と昼食を食べ、昼休み(有志の音楽祭の練習)を過ごし、午後3時間の授業(3年生 数学・2年生 英語・

1年生 理科)、その後の掃除と帰りの学活に参加させてもらいました。

自分は「一人ひとりと向き合えなければ、全体でも上手くいかない」と考えています。だから、「生徒一人ひとりと向き合う」ことを一番に考えていました。初め、数人の生徒から信頼を勝ち取り、徐々に輪が大きくなって多くの生徒に受け入れてもらえるようになりました。向こうから挨拶してくれたり、声をかけた子が「土曜学習会」などに来てくれました。

しかし、時にはそれが良くないことも学びました。例えば、授業の中で生徒が分からない問題があり、その問題が分からなければ次の問題もわからないとき、自分は生徒に理解してもらうために次の問題の解説が始まって最初の問題から教えていこうとしました。(聞いたってどうせわからないと思ったから)だが、これは先生の授業です。自分はあくまでも“補助”です。その生徒にとって、1度しかない先生の説明を結果的に奪ってしまったことになります。また、自分がその生徒に教えている声は周りの生徒にとっては邪魔(全体指導の邪魔)になっていることを考えるべきでした。「一人ひとり」を見るあまり「全体(空気を読む)」が見えていませんでした。中学校では、クラス1つを、生徒一人を、複数の先生がチームになって支援しています。その中では、「全体をみる」「少し引いてみる」ことも必要なことを教えてもらいました。

中学生は、まだまだ子どもですが、自分で考えて動ける・自分らしさが出てくる大人の面も持っています。「自分で考えて、判断し実行する」練習の時期であり、また人生で最も変化しています。いい意味で“中途半端”です。3年生ははじめがあり、自分の進路と向き合おうとしていましたが、1年生は授業中も遊んでいるような面もあり、学年による“幅”，また同じ学年の中でもその“差”を感じ取ることができました。その“個人差”が大きく、いろいろな生徒がいて、その変化(成長)に、関わってい

けることはとても面白く、魅力的だと思います。しかし、それはとても難しく、大変で、責任があるということを意識する必要があります。仮に教師でなくても生徒と関わるなら必要です。それが「大人としての立場」です。自分はこれを忘れて、中学生と関わっていました。大学生のボランティアだとしても、生徒から見れば「大人」の一人です。自分の言動が生徒にどう見られているか、どう伝わっているのか考えることも重要です。いくら打ち解けて仲良くなったとしても“友達”にはなれません。寄り添うことももちろん大切ですが、しっかり伝えるところ、言わなければならないこともあります。3年生の担任の先生の言葉は厳しい内容の言葉も多かったですが、そこに愛を感じました。自分には身に沁みる言葉でした。そのメリハリをつけることもポイントです。

ボランティアを通して、「中学校の現場（本物の学校・授業・生徒）」を経験することができました。始めの自分はただ「中学生と触れ合いたい」という甘い考えで参加していました。しかし、それだけではダメなことを教えてもらいました。将来「教師」になりたい自分のために、指導してくださった先生方、本当にありがとうございました。指導してもらえることはありがたいことですが、先生の「叱ってもらえるうちはその人に甘えていることだから」という言葉を意識して、本当の意味での自立を目指そうと思いました。土屋小学校・土沢小学校のみなさん本当にありがとうございました。

29. 学年による生徒の対応の違い

生物科学科 3年 佐々木 翔

私は、土沢中学校へ火曜日の午前中（9:10～12:00まで）にボランティアへ行きました。ボランティアでは、理科、数学、英語の授業の補助、特に、英語の授業の補助に入らせても

らった場合が多かった。英語、数学、理科の授業補助を通して、全学年の中学生と接することができた。英語の授業では、ネイティブの先生が英語しか使わない授業だったので、そこまで難しい単語は使っていないものの、やはりところどころ聞き取れない部分があったので、そこで、先生がどんなことを話しているのかをわからなかった生徒に教えてあげたり、他の英語の授業では、教科書にのっている英語の物語（100字から200字）の日本語訳の発表や、音読練習の補助として、質問を聞いて回ったりした。英単語カードの作成や、テストの採点も行った。数学の授業では、問題演習をする時間に補助として入ったため、ひとりひとりどのくらい理解しているかを確認しながら質問を聞いてまわったり、指導したりした。理科の授業の補助では、先生の発問が多かったので、生徒側もいろんなところで自分の思い思いの答えを言っていたので、そういったことへの対応や、質問に答えたりといった活動を行った。

ボランティアとして実際に教育現場に入ってみて発見したこととして、生徒と直接会話をしなくても、ある程度その生徒が先生の話や、授業内容を理解しているかがわかりやすかったということがある。たとえば、手がすらすら動いている子はどんどん問題に答えているが、わからない子は、手が動いていなかったり、集中していなかったりしていて、特に数学では、できる生徒と理解していない生徒の差がはっきりしていた。客観的に見ていて、その差を感じることはできたが、実際に授業をしながらそこまで気を配って進めていけるかという点では、模擬授業ですらどう進めるかということにだいたい集中していて、あまり生徒の理解度をうかがいながら授業をできていないと感じ、やはり生徒がわかりやすかったと感じる授業が改めて一番よい授業だと思ったので、この点はこれから大事にしていこうと考えるきっかけになった。

また、ボランティアをしていて、先生方の生徒への接し方がとても参考になるところが多

かったと感じた。グループで訳文を発表するという英語の授業で、やはり、グループにすると、生徒どうして違う話をしてしまう班がほとんどであった。そこで先生はやるときはやる、でもそこまで硬い雰囲気の授業にもしないような工夫がされていて、授業のテンポがほどよく、いろんな点ですごくバランスのよい授業だったと感じた。

特に印象深かった出来事も英語の授業の前と授業の最初に起こった。2年A組の英語の授業で、その授業は移動教室で行われることになっていて、その移動する教室は先生が来てから鍵が開くようになっていたため、廊下で生徒たちが待機していた。が、一部の生徒が騒いでいたり、廊下の掲示物をはがしたりといったことをしたりしていたため、授業の最初の5分くらいで説教というほどきつい言い方ではなかったが、もうすぐ3年生になること、この中には中学を卒業したらすぐ働く人もいられるかもしれないことなどを言い聞かせていた。その言い方も勉強になるなと感じたのだが、ちゃんとほめるところも言っていて、でも、ここは直した方がいいぞ、という言い方をされていて、その話もあり長々としていなかったで生徒も嫌な気分にならず聞けたのではないかと感じた。先生もおっしゃっていたが、一番難しい時期が中学2年生で、これは自分も少し会話をしたが、答えがそっけない感じだったことなどから感じるがあった。ひとりひとりはもちろん、学年によっても生徒の雰囲気がまったく違うことを直接感じる事ができたので、このことも実際に現場に出たときには頭において行動していこうと思った。

30. 視点が変化して感じたこと

生物科学科 2年 柳沢 甫子

土沢中学校へ学校ボランティアに行かせてい

ただきました。ボランティアでは、主に2年生、3年生の理科、そして3年生の数学の授業にいらしていただいて、実験の補助(理科)やワークなどの問題を解くときにわからない様子の生徒に解き方を指導する(理科、数学ともに)、ということをしていました。しかし、実験などがないときは、授業見学というかたちになってしまうことが多かったです。そのようなときは、先生がどのように授業を始め、進めているのか、新たな単元に入るとき、導入はどのようにしているのか、授業中の生徒への対応はどうしているのか、というような先生の動きを観察し、同時に授業中の生徒の様子を観察していることが多かったです。参加させていただいている間、自分の立場というのがとてもあやふやだ感じました。ちゃんとした先生なわけではないですが、生徒から見れば先生と同じような存在であるし、先生方からしたら授業をお手伝いしてくれる“(教師を目指す)大学生”なのではないかと思います。主観的には、教師であり生徒でもある、と感じてしまっていたのが正直なところでした。

ボランティアに参加してみて、今の中学生の様子を知ることができました。私の知る“中学生”というと、自分が中学生のときで、生徒の立場であったときの様子しかわかりませんが、根本的なところは自分のときとあまり変わらないかなと感じました。中学生だった頃の私は、多少授業中うるさくても、周りの人がおしゃべりをしている、気にすることはあまりありませんでした。それは、まず第一が自分であり、自分が授業を聞くことができれば、周りにはあまり関係ないと思っていましたし、聞いてない人は自己責任だろうと思っていたからです。ですが、教師という立場から“授業中が騒がしい”という様子をみると、非常に授業がやりづらい状況だと感じました。中学生に、授業中一切しゃべるな、というのはなかなか難しいことかと思いますが、実際は多少のしゃべり声でもかなり気になることがわかりました。例を挙げる

と、理科で先生が実験の説明をしているとき、生徒が小さい声でもしゃべっていると、たとえば他の生徒の邪魔にならなくても話をしていた生徒自身が実験内容を理解していなかったりすることが多かったです。話を聞かないということは、危険が及ぶ可能性があり、生徒だったときは危険な実験をしている自覚はありませんでしたが、それは先生がしっかりと準備した上でかつ生徒も何をやるのかをある程度説明を聞くことで理解しているからこそ成り立つことだったのだと感じました。話を聞かないことに対し、生徒自身がそれでよくても、教師としての立場からすると危険が及ばないように話しているわけですから、きちんと生徒に話を聞いてほしいものだと思えました。

今回行わせていただいたボランティアは、教師という立場でありながら同時に生徒でもあったので、客観的に中学生の様子や先生方の様子を知ることができました。また、かつての自分が授業に対し思わなかったことや、知らなかったことなど、立場が変わるだけでかなり感じるものが違うのだと思いました。中学を卒業してから実際に中学生と触れ合う機会というのはなかなかないので、今回のボランティアは実際の今の中学生の様子、授業の様子を知る良い経験になったと思います。今後の授業に活かそうなことや、反省する点もたくさんあったので、忘れないようにしていきたいと思いました。

3 1. 教師の立場に変わって気づいたこと

生物科学科 2年 高萩 貴博

学校ボランティア活動として、平塚市立土沢中学校に行ってきました。自分は、主に火曜日の2時間目の10:10～11:00の授業内で活動を行いました。学習支援としての活動では、大半が2年A組の理科の授業で、1回だけ1年A組

と3年A組の理科の授業で活動を行いました。学習支援といっても、学習支援の内容は、教室の後ろに立って、中学校の先生の理科の授業をしている様子や生徒の授業を受けている様子を見学するのがほとんどでした。実験を行う場合には、授業前に実験に使用する器具などの準備を行ったり、実験の補助に入ったり、授業後に実験に使用した器具などの後片付けを行ったりしました。先生が授業中に練習問題をやるように指示した場合には、机間指導を行い、分からないようにしている生徒や困っている生徒のところに行ってどうやって問題を解くか教えてあげたり、生徒の解答を確認してあげたりしました。また、学習支援以外の活動では、壁に貼ってあった昨年の1・2・3年生の理科の夏休みの宿題と3年生の自由研究をはがして、今年の1・2・3年生の理科の夏休みの宿題と3年生の自由研究を画紙で壁に貼り付ける作業も行いました。

今回初めての学校ボランティアということで、中学校で生徒の立場だった自分が初めて教師の立場に変わって今までの生徒の立場では分からなかったことや考えもしなかったことなどを気づいたり、感じたりすることができました。

教室の後ろから生徒の授業を受けている様子を見学してみると、授業の雰囲気の違いについて気づくことができました。1・2・3年生の授業を見学しましたが、受験生でもある3年生の授業の受け方は、1・2年生の授業の受け方とは違うことを感じ取ることができました。3年生は先生の話や指示をよく聞いてすぐ行動していたので、1・2年生より学習する環境が整っているように感じました。自分が中学生の時には、中学生の学年に関わらず、授業を受けている雰囲気なんてあまり変わらないと思っていました。しかし、今回初めて教師の立場で授業を見学してみると授業の雰囲気の違いについて気づくことができました。また、生徒の夏休みの宿題と自由研究を見ることによって生

徒の学習のレベルの高さに気づくことができました。その夏休みの宿題がどんな内容か確認してみると、1年生は植物、2年生は動物について調べてあり、中学の理科で学習したことを踏まえてあってよくまとめていると感じました。3年生の自由研究もどんな内容か確認してみると、宇宙について調べたものであり、まだ習っていないような高校や大学での学習する内容も含んでいてよくまとまっていると感じて中学生でもここまでできるのかととても驚きました。

他にも、中学校の先生の授業を見学することでも、気づくことができました。中学や高校で学習する内容より専門的な多くの知識やそれ以外の知識が必要であり、生徒の興味を引くような内容に結び付けて授業を行わなければならないと思いました。また、実際の授業では、自分の計画通りに進むことが少なく、授業で様々なことが起こるということにも気づくことができました。このような状況になった時に、いかに教師が臨機応変に対応できるかが大事だと思います。

今回の学校ボランティアで土沢中学校の教育活動を補助しながら、教育活動を体験してみて、困ったことや考えさせられたことがあったので、教師に必要な力が自分にはまだないということを実感することができました。これからはこのような体験を通して、教師に必要な力を一つでも多く身につけていきたいと感じました。また、このような体験はあまり多く体験できるわけではないので、とても貴重な体験をすることができました。しかし、今回の教育活動はまだまだほんの少しの教育活動にしか過ぎないので、これからはもっと様々な体験を通して、今回以上に気づいたり、感じたりして、自分をさらに成長させていければいいなと思いました。

羽沢小学校・後期

3.2. 教育とは能力を引き出すこと

国際経営学科 3年 佐藤 彩香

〔学校名〕横浜市立羽沢小学校

〔活動内容〕特別支援学級、またはその生徒が受ける一般級でのサポート

私は将来小学校の教師を目指している。実際の学校現場を教師目線で体験するために、私の地元にある羽沢小学校特別支援学級でボランティアをして、もうすぐ1年になる。週に1度、午前中しか関わっていないにもかかわらず、特別支援学級の子どもたちが私のことを楽しみに待っていてくれるようになった。そんな子どもたちは前期と比べ、少しずつ心身共に成長をしている。例えば、朝の会の時間は落ち着かずお喋りを始めてしまう子でも先生の一声で、すぐ止めることができたこと、行儀のいい子、運動神経が良い子などの真似をして自分もできるように努力していること、体育の前の着替えが早くできるようになったこと、小さなことかもしれないが、徐々にできないことができるようになっていく。また、4月には学年が上がるということも意識し始めているのか、後輩にわからないことは教えてあげるという優しさの面も多くみられるようになった。これは子どもたちの努力の結果ともいえるが、先生の日々の授業の工夫があったからこそとも思う。

まず、特別支援学級は授業ごとに目標設定するのではなく、子ども一人ひとりに向けて目標を立てている。それは子どもによって得意なことや苦手なこと、できることできないことがそれぞれ異なっているからである。子どもたちの目標に合わせ、これができたら◎、努力していたら○など評価をする。また、できなければ次回の目標を少し下げる、やり方を変えるなど試行錯誤する。そこで先生は、子どもたちに目標

が達成できるようにアシストするような授業を行っている。例えば体育の時間で、「大股で跳びながら移動してみよう」という時間があった。一般級の子どもたちなら容易にできるかもしれないが、これが特別級の子どもたちには意外と難しい。そこでまず、先生がお手本を見せ、子どもの注目を惹く。次に、実際にやらせてみるが上手くできる子とできない子でまず別れてしまう。ここで、できる子にはしっかりと褒めてやり、「みんなのお手本になってね」や、「もっとタイムを縮めてみようか」など子どものやる気をさらに高めるような声を投げかける。できない子には足が入るぐらいの丸い輪を地面に散らばらせて、「輪から輪へ跳んでみよう」と、アイデアをめぐらせ違う方法で跳ぶ意識をもたせる。こういった授業のやり方やアイデアは、先生にとって重要なのではないかと私は思う。

私の体験であるが、大学では中学校社会科の模擬授業を十数回行い、教材研究に時間をかけた授業ほど周りからの評価が良かった。それはどういった流れでまたどういった例でこれほどの知識をわかりやすく説明できるか、そのためには地図帳、新聞記事、動画などの教具を使うのが適しているかなど、様々に思考をめぐらせ、時間をかけながら授業を構成したためである。また、ガリレイは「人にものを教えることはできない。できることは、相手のなかにすでにある力を見出すこと、その手助けである。」という名言を残した。この教材研究などにかかる時間と上記の言葉こそが特別支援学級の先生たちが実際に取り組んでいる活動ではないかと思う。

子どもたちはもともと潜在的な能力を秘めており、子ども自身はその能力をどう出せばいいのかわからない状態である。教師はそれを、興味を湧かせ引き出すこととアシストして引き出させることを重視している。このことが子どもたちを自立させる授業へと繋がっていくのではないだろうか。私は来年この学校にて教育実習

を控えている。このボランティアで得た様々なアイデアや技術を活かし、子どもたちに良い授業ができるよう、日々精進していきたい。

土屋小学校・土沢中学校・後期

3.3. 学校行事による人間関係の形成

化学科 4年 田中 浩貴

私は、土屋小学校と土沢中学校へ学校ボランティアに行きました。土屋小学校では、主に授業支援と校務員さんの仕事の手伝いを行いました。授業支援は、毎回授業に入る学年が違い、教科もさまざまでした。校務員さんの仕事の手伝いは、校庭や畑の環境整備などを行いました。土沢中学校では、主に授業支援でした。理科、英語、数学を担当しました。授業支援はもちろんのこと、理科では、実験の補助などを行い、英語では、単語カードの作成、数学では、練習問題の答え合わせなどを行いました。また、夏季休業中には、夏季補習や運動会の練習、運動会当日の補助なども行いました。小学校ボランティアは2年次の前期から、中学校ボランティアは3年次の後期からやっていますが、日々成長している子供たちとともに、自分にとっても毎回の学校ボランティアでさまざまな発見があり、教師になるために成長できたと思います。また、今回の学校ボランティアで印象に残っていることがあります。

土沢中学校の運動会でのことです。普段の学校ボランティアでは見れないような、生徒たちの違った姿を見ることができました。運動会の1週間前から全校練習が始まりました。主に、組体操の練習の補助を行いました。私は、今まで組体操をやったことがなかったので一体どんなことに注意していればいいのか分かりませんでしたが、とにかく、生徒たちが怪我をしないように、生徒に寄り添うことにしました。何度か練習を見ているうちに自分でも「こうした方がいいんじゃないか」と思うことをどんどん子どもたちにアドバイスするようにしました。アドバイスをしたことによって、改善される生徒

もいれば、中々改善されない生徒たちもいました。ペアで行う組技で、練習の時にはほとんどと言って言いほど失敗していました。そして、結局満身に成功しないまま本番当日を迎えました。私は、練習の時同様、生徒たちが怪我をしないように注意しつつ、傍で見守っていました。太鼓の合図とともに組技を作る生徒たちを祈りながら見ていた瞬間、見事に成功させました。生徒たちの顔は満面の笑みで、私にアイコンタクトで「やった!」と語りかけてきました。「失敗は成功のもと」「終わりよければ全てよし」などという言葉を実証してくれたような気がします。彼らが、今回の経験を勉強や部活にも活かして、どんなことにも諦めずに挑戦して欲しいと思います。

他にも運動会では、全校生徒が参加する種目が印象に残りました。組体操では、個人の技から始まり、ペアの技、グループの技、そして、全校での技になりとても迫力のある演技でした。そのあとの、3年生のみで行う人間ピラミッドやスーパーマンジャンプなども中学校最後の運動会での有終の美を飾るようなものでした。全員リレーも綱引きも各学年が一致団結してひとつのことを成し遂げてようとしている姿がとても良かったです。

いつもの学校ボランティアでは経験できないようなことを今回の運動会の練習、当日の補助で経験することができました。結果、運動会での先生方の動き、注意する点などを学ぶことができました。そして、授業では見れないような生徒たちの輝いている姿が見れましたし、生徒たちとの距離も縮められることができ、ある程度信頼関係ができたと思います。お陰で、後期から始まった土沢中学校のボランティアで、生徒たちから積極的に話しかけてきてくれたり、授業についての質問をできるようになったり、私の問いかけや指示に応えてくれるようになりました。

生徒たちにとって、学校行事が生徒同士の人間関係を形成する上で重要であるように、教師

にとっても、生徒との関係を形成する上でとても重要なものであるということを今回のボランティアで実感することができました。

3.4. 対象・目的に合わせた板書づくり

情報科学科 3年 栗原 史帆

10月1日から12月10日の期間中、小学校は月曜日の12:40～14:30(給食・掃除・昼休み・5時間目)に7日間、中学校は主に木曜日9:10～10:00(中学2年生・1時間目・数学(3回))と15:00～16:00,16:00～17:00(放課後学習会(2回))に4日間の計11日ボランティアに参加させていただきました。

小学1年生から中学2年生の授業に参加して感じたことは、板書に関する違いでした。まず1点目は学年・年齢という点に応じた板書の仕方の違い。2点目は教科ごとの板書の違いです。

まず1点目の学年・年齢による違いでは、生徒が板書をノートに写すとき、教師の指示の量がとても違うことを感じました。小学3年生の算数の授業(分数)と中学2年生(三角形の合同)の数学の授業を比べた時に、どちらも板書には図が含まれており、教師は板書を始める前、もしくは書き始めてすぐの比較的速い段階で生徒に「先生は横に書くけど、みんなは下に書いてください。」などの板書をノートに写す時の指示をだしていました。中学校では、ほとんどがこの一言で終わり、そのあとに教師は特に何も言及せずにそのまま授業も板書も進んでいくことがほとんどで、生徒も特に板書を書き写すことに疑問を持たず、疑問をもったとしてもすぐに教師に聞くなど、特に問題なく進んでいきました。対して小学校では、まず児童のノートに特徴がありました。小学生の算数のノートにはすでに薄い方眼が印刷されており、その方眼の数はノートによって異なります。児童のノートは横の方眼が10～15マスほどでした。教師

は板書の指示を出す前に児童に「横に何マスある？」など問いかけ、これからする板書(何マス目までにこれを書いて……などの指示)を児童が疑問を抱かず正確に書き写すための確認でした。このような細かな確認をした後でも、児童からはいくつかの板書の書き写し方についての質問があり、中学生との違いを感じました。小学生と中学生では板書をするにあたり言及すべき量が小学生にとっても多く中学生と差を感じました。そのあとに算数ではないのですが高学年の授業にも参加しみていたところ、板書自体はノートに写しやすいように見えたのですが3年生とは比較にならないほど指示の量が減っていました。児童のノートもあまりまとまっているとは言えませんでした。その中で児童のノートをちらっと見た教師が「きれいに書けよ」というたった一言の指示(つぶやき程度)をだしており、ノートを消して自分なりにきれいに書き直している姿をみて、これが小学3年生と中学2年生の差の中にある過程だと感じることができました。

次に2点目の教科による違いです。複数の教科に参加したのは小学校のみでまた、同じ学年で複数の教科をみることはほとんどなかったのが教科だけでなく、学年も越えて感じた違いになってしまうのですが、教科によっては板書をノートに写さない場合があります。このようなときには1点目に挙げたように慎重に使うのではなく、児童に「ノートは出さなくていい」などの指示は出すとともに、板書も教師の話を視覚的に理解するための補助として、大きく、図的に大胆に黒板を利用していました。また、話しながらであり、書くスピードにも速さを感じましたが、この話に慎重な板書では児童はきくと聞くのに疲れてしまうだろうと感じました。

今回この2点をあげ、教師は児童・生徒に合わせた、授業を受けやすい板書・ノートを取る力をつけるための板書など、児童・生徒が成長する板書を作っているのだと知ることができました。

みずほ小学校・土沢中学校・後期

35. 先生方の視点

生物科学科 科目等履修生 福田 晋也

私は週1回みずほ小学校へ学校ボランティアに行っています。今回はそのみずほ小学校でボランティアをしていた時、その中でも林間学校を通して私が反省すべき点、そして見習っていかねばならない先生方の視点を中心に記録しました。

林間学校の予定は一泊二日で一日目はパークゴルフ、屋外でカレー調理、夜にはキャンドルファイヤー、ナイトウォークを行いました。二日目では宿泊地で自分たちの使用した部屋の掃除、ウォークラリーを行った後、神奈川大学で食事をとり、解散となりました。

私の林間学校での手伝いは、レクリエーションの中で怪我がないか、欠席した児童に代わって班の手伝い、そして神奈川大学内の案内をすることでした。

私が反省すべき点は二つあります。移動は基本徒歩でした。一つはパークゴルフ場に向かう時、児童達は道端のくつつきむしを拾って投げ合いながら目的地に向かっていました。その途中で列を外れ、自転車を運転する人と衝突しそうになりました。もう一つは横断歩道を渡るときです。それは神奈川大学への案内で私が先導していた時です。私は案内をするにもかかわらず、横断歩道を渡らないで道路を横断しようとしました。この場合、私の行動が手本になっているので、行動を考え直さなければならないと思いました。この二つについて私は周りを見ること、自分の行動について考えなければならないと思いました。

私が見習っていかねばならない先生方の視点は多々あります。それは一日目の夜、林間学校が終わってからの反省会です。反省会では

一日の間に起った問題や生徒の様子など、先生から見て先生方に伝えなければならない点を報告しあっていました。児童の様子では一人一人の出来事や行動をさまざまな視点から分析し、どうすればよいかなどを話し合いました。他にこの林間学校の中で先生方が見つけた児童の成長した点を話し合いました。それはパークゴルフ、カレー調理などのレクの中で、児童たちの間で見られた譲り合いや協調性のある行動でした。その成長した点については、一年前と比べて児童の成長の様子を見ていました。

見習う点は他にもあり、一日目の夜に児童たちは遊んだりして、一睡もしていない児童が大半でした。私はすぐに寝ましたが、先生方は児童達に何か問題が起きた時に対応できるよう、一晩中起きていたそうです。学校の行事は学校での授業などの日常生活とは違い、児童という時はどんな時でも気が抜けないことが分かりました。

今回のボランティアでは児童と長く居た中で、私は初めて担当した6年生の児童と仲良くなることが出来てよかったと思っています。そのほかに先生方が児童たちのことをさまざまな視点から見ていたことがわかりました。今後私は児童の行動を確りとみて、いろんな視点から分析し、長い目で児童の成長の姿を見ていかなければならないと思いました。また先生方から寄せられる一つ一つの情報がさまざまな問題を未然に防止し、活気がありながらも穏やかな児童、そして学級を築いていくのだと学びました。

土沢中学校・伊勢原高校・後期

36. 学ぶことができること

情報科学科 3年 佐々木大輔

土沢中学校 授業補佐及び補講指導

伊勢原高校 部活動支援（バドミントン部）

土沢中学校では、おもに数学や英語の授業補佐と木曜日の補習を行っていました。

数学や英語の授業補佐は基本的に授業に入ってから生徒が問題を解いているときに分からないところのヒントを出したり教えたりすることや生徒のスピーキングの相手になったりしました。生徒たちも長く来ているのでだいぶ隔たりなく話しかけてくれているので授業に入るたびに頼ってきてくれるので毎回行くのが楽しみになりました。

木曜日の補習は数学の指導をしました。1年生と3年生の数学をみました。3年生は入試にかかわる最後の成績のつくテストだったのでみんな熱心に取り組んでいてより応援したくなりました。そして、「佐々木さん、前回より点数が上がったよ。」と報告してきてくれたりもしてくれました。それを聞いたりするととてもとてもうれしくなります。

伊勢原高校にも教育委員会を通してボランティアに行っています。伊勢原高校では、部活動支援としてバドミントンを教えに行っています。

しかし、私はバドミントン経験がなく、指導をしに行っているというよりは指導してもらっている感じがします。ですが、もし自分が教育現場に入ったとして自分がしていた部活動を持てるかどうかはわからないので、これも一つのいい経験として行かせていただいています。

夏の前から行き始めて、高校生も慣れてきてくれて少しずつ話しかけてくれるようにな

りました。夏休みには自分が指導してきた生徒たちが大会に出て、その試合を目の当たりにしました。試合では団体戦は2回戦で敗退しましたが生徒たちにはその悔しさなどから自分に足りないものが何かなどを気づいてどうすればいいかなどを具体的に考えてほしいと思いました。

このボランティアをやっていてよかったと思うのは、先生ではなくボランティア生だから先生よりも生徒の本音を聞けるというところです。

普段、先生には言えないことの相談を受けたり、友達みたいに話すことができるので生徒がどのように思っているのかが分かるので、もし自分が教職員になった時にどう対策しようか考える上で参考になりました。

二つのボランティアを行って、共通することが生徒と一緒に学ぶということを体験できることや、先生方とのかかわりの中で教育業界でほしい人材がわかってくるので、行くことだけで勉強になるので、これからも行けるときはボランティアに行こうと思いました。